琉球大学学術リポジトリ

「最近の臺灣」始政三十年記念 臺灣総督府

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38307

矢内原忠雄文庫

史料名	「最近の臺灣」始政三十年記念 臺灣総督府 大正十四年六月
封筒番号	303
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 16 日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 303

史料名	「最近の臺灣」始政三十年記念 臺灣総督府 大正十四年六月
資料形態	冊子
枚　数	20
頁　数	40
縦（cm）	22
横（cm）	19.2
厚さ(cm)	
書誌的事項	台湾 今泉分類記号： P

最近の臺灣

始政三十年記念

臺灣總督府

1/12

一此の冊子は最近に於ける臺灣事情の概要を成る可く廣く紹介するために編纂したものである。

一臺灣の始政三十年を記念して出版したもので、必要と認めた事項に就ては既往との比較や變遷推移の跡をも併せて記述した。

一其の記述は出來得る限り平易簡潔にし、數字の如きも極く必要な程度に止め、煩鎖な統計の如きは避くることにした。

大正十四年六月

臺灣總督府

目次

位置と風土……一
住民……二
統治……三
宗教……六
教育……七
衛生……八
交通、通信……八
土木工事……一〇
産業……一二
貿易、金融及び財政……一九
專賣……二一
社會事業……二三
調査研究機關……二三
新聞、雜誌……二四
〔附錄〕
都市、名所、舊蹟、臺灣遊覽案內……二五

最近の臺灣

位置と風土

〔地勢〕 臺灣は日本の領土の南端を占めて、鹿兒島から西南六百四十一浬の海上に在る。如何にも遠いやうであるが、航程にすれば、門司から直航二晝夜乃至三晝夜半、那覇からは僅に一晝夜にして達することが出來る。周圍三百九十九里、面積二千二百三十二方里、即ち其の廣さに於て九州や樺太と略ほ相匹敵してゐる。

形狀は瓢簞形を爲して、南北に長く百餘里に延びてゐるが、東西は中部の廣い所も高ほ四十里內外である。所謂中央山脈が積、東に偏して南北に縱走し、其の中央からはシルビヤ、水社、新高の諸山脈が西方に分岐して居り、北端には更に大屯火山彙が橫居してゐる他、別に東方には海岸近く中央山脈に竝行して海岸山脈が南走してゐる。斯くて全島面積の約三分の二は山嶽地帶であつて、此の山嶽地帶こそは、久しく帝人が擯つて蹂躪を極めた所であり、今後年と共に開發せらる可き寶庫である。

然して、臺灣の地勢はこれを大體から見れば、中央山脈によつて明かに東西南部に分れて居る。即ち東部に在つては、海岸山脈との間に一條の田野を見る計りで、斷崖直に海に接してゐるが、西部に在つては、一目茫々たる大平野を展開し、濁水、大甲、曾文等の溪川が其の間を貫流して、本島の主要產業たる農業の灌漑を成してゐる。

尙ほ臺灣の地勢上、特筆す可きものは其の累々たる高山である。海拔一萬三千三十五尺(三九五〇米〇〇)を有する日本の最高峰新高山を始めとして、一萬尺以上の高山が實に四十八座の多きを數へてゐる。富士山の如きも其の順位からすれば漸く第六位であり、內地第二位の高山赤石山が辛じて四十五位を占め得ると云ふ事實に見ても、臺灣に於ける高山重疊の樣を想像することが出來やう。文祿年間、豐臣秀吉が此地の朝貢を促すに當つて、高山國の名を以て呼んだことも、同じ十六世紀の頃、葡萄人が初めて海上より此島を望見して "Formosa" と讃嘆し、爾來本島の別名となつたと云ふことも共に首かれる。

〔氣候〕 臺灣の位置は、之を經緯度の上から見れば、東經百十九度十八分から百二十二度六分、北緯二十一度四十五分から二十五度三十八分の間に在り、即ち北回歸線は丁度中央を橫斷して半ば熱帶の圈內に入つて居る。從つて內地に較べると夏季は非常に長く冬季は短い。けれども其の氣溫は、最も暑い七月の累年平均に於て臺北八十二度四、臺中八十一

新高山

度七、臺南八十一度九を示し、八月の東京、神戸に比して二度乃至五度高く、八月の漢口、五月の馬尼拉に比して約一度低く、決して特に高溫とは云はれない。最高の極でも之を新潟、大阪等に比較して、却つて低率を示して居る。是れ主として四圍が海洋である關係であつて、夕景からの爽快な涼味は、多く內地に於てさへ味へぬものがある。更にまた臺灣の冬季に至つては、北部の寒冷氣節一、二月に在つても尙ほ、內地の四月か十一月初頃の最好適な氣溫であり、爲に四季不斷に花と菁果とを賞し、常綠の山野に接することが出來る。

此他本島の氣象の特徵として、一年は乾燥季と雨季とに分れ、夏季は北部の乾燥季であり南部の雨季であるが、之に反して冬季は北部の雨季であり南部の乾燥季である。北部の雨季は陰霖連日、恰も內地の梅雨のやうであるが、南部の其れは概ね雷雨相伴ふ所の熱帶的驟雨であつて、爽涼心身を蘇らしめる。但し颱風と稱する熱帶暴風の進路に當つてゐる本島が、毎年七、八、九月の頃、その襲來を受けて大小の損害を免れぬことは、一つの災ひである。

住民

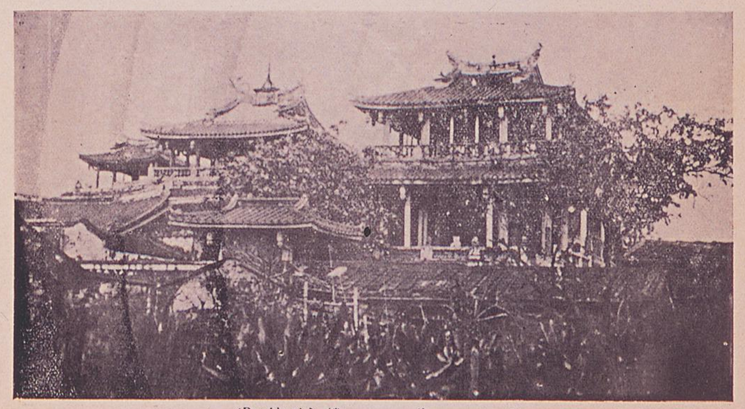
日本の一般國勢調査は、大正九年十月一日を以て初めて行はれたのであるが、臺灣に在つてはそれより先、明治三十八年十月一日を以て事實上の國勢調査である所の第一回戶口調査を行ひ、更に大正四年十月一日には第二回の調査を遂げたのである。故に本島では大正九年施行の分を合せて、前後匡に三回の國勢調査を行ひ、今や其の第四回目を行ふ準備中であつて、此點は確に內地よりも一歩進んでゐる譯である。

住民は之を大別して內地人、本島人、外國人の三種とする。內地人とは領有後に移住したものであり、外國人と云ふのは大部分支那人であつて歐米人等は極めて小數である。又本島人は漢人種と蕃族とに分たれ、更に漢人種は其の原籍地方別によつて福建、廣東の兩族に區別されて、全住民の九割强を占めてゐる。蕃族は本島人中の最も舊い種族であつて、生蕃と熟蕃とに分つ。大正十三年末各種族の人口內譯は左表の通りである。

	總數	男	女	百分比例
總數	四〇四一、六〇二	二〇六〇、八三三	一、九四〇、八九九	一〇〇
內地人	一八、五二一	一〇一〇、〇	八二三、七	四、五
本島人	三、七四二、二二六	一、八二三、九九九	一、九二八、四一七	九二、二
蕃人	八四、八九六	四二、六八〇	四二、二一六	二、一
外國人	三一、二五五	二五、四〇四	七、八五一	〇、八

（備考）右の表で本島人中には平地居住の蕃人五萬二百四十三人が合算されてゐるから、蕃人の數は蕃地居住の生蕃人のみを示してゐる。

即ち之を面積に當てると一方里について住民一千七百五人となり、其の密度は、內地府縣に較べると一千二百二十九人少く、朝鮮に比べると四百五十五人多く、北海道に比較すると一千二百六十三人多いことになる。



赤崁樓 (Providentia)

臺灣總督府

統治

（臺灣の歷史） 臺灣の古い歷史は甚だ明瞭を缺いでゐるが、少くとも數百年前までは、未だ何れの强國にも屬せぬ洲沖時代であつたと云はねばならぬ。日本との間にも、十五世紀の初め頃から既に幾多の交涉を持つてゐたことは史實に徵して明かであるが、支那との交涉に至つては、更に遠く恐くは古代から始まつたものであらう。

和蘭が初めて、此地に占據したのは、今から丁度三百年前、一六二四年で、臺南に政廳 "Providentia" 城を築いて、本島の經營に從つたのであるが其の間三十八箇年。之に取つて代つたものは、肥前平戶に於て、日本人田川氏を母とし漢人鄭芝龍を父として生れた鄭成功であり、兒孫相繼いで三代本島の統治に當つたが、其の間また僅に二十三箇年にして、一六八三年遂に確實に淸朝の領有に歸したのである。

而して更に越えて明治二十八年四月、下ノ關條約に依つて日本の版圖に入つたものであつて爾來施政三十年、其の間十代の總督及びこれを輔翼する九代の總務長官（曾では民政局長又は民政長官と稱したが歷任してゐる現任總督は伊澤多喜男氏、現任總務長官は後藤文夫氏であつて、共に臺灣に對して、質實にして且つ理解ある政治を行はうと努めてゐる。

（臺灣總督府） 臺灣總督府は、云ふまでもなく本島統治の根本機關であつて、臺灣總督を頂き、總務長官がこれを佐けて、諸般の政務を統理する。總督府には總督官房の他、內務局、財務局、殖產局、警務局の四局を置き、別に特設機關として、交通局、專賣局、稅關及び中央研究所等を設けて、行政其の他夫々適當の事務を取扱ふ。

尙ほ民意を徵する機關として總督府內の高等官及臺灣に居住する學識經驗ある者の中から任命された評議會員を以て組織した總督府評議會がある。

又地方行政の爲には、全島を五州二廳に分け、人口が稠密で民度の進んでゐる西部を臺北、新竹、臺中、臺南、高雄の五州となして州知事を

置き、人口稀薄で民度の未だ進んで居らぬ東部を臺東、花蓮港の二廳として廳長を置いてゐる。

州は又更に之を細分して五市、四十六郡となし、二百五十八の街、庄を置き、廳は又之を七支廳となして、三街庄、十九區に分けてある。

〔地方公共團體〕 前に掲げた州、市及び街庄は地方行政官署であると同時に地方公共團體である。但し之は臺灣の現狀に鑑み內地の府縣制市制及び町村制とは稍其趣を異にして居る。卽ち其の職員の首班部は行政官署たる州、市又は街庄の職員を以て充てられ、又內地の府縣會市町村會に當る州、市街庄協議會は官選の協議會員を以て組織され、豫算其の他公共に關する事項の諮問機關たるに過ぎないが、これは將來民度の進むを待つて漸次內地同樣の制度に改めらるゝ筈である。

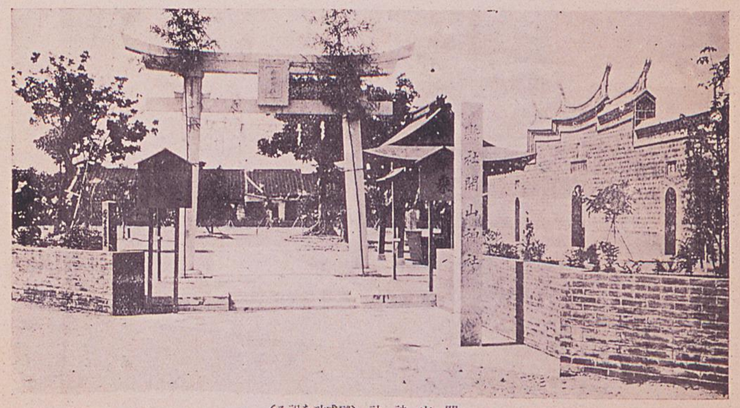
〔法制〕 本島が日本の領有に歸した當初、數千年の習い歷史を背景とする漢民族の住民に對して、直に內地と同一の法律を實施し得ない事情のあつたことは勿論であつて、所謂六三法なるものは、右の必要に應じて明治二十九年三月民政を布くと同時に發布されたものである。其の要領は、總督に法律と同等の效力を有する命令を發し得るの權限を與へ、また內地施行の法律中臺灣に施行するも差支のないものに限り、勅令を以て之を定めること、したものであつた。卽ち臺灣に於て法律を要する事項は、原則として總督の命令に依り、例外として內地の法律を施行したのであるが、時勢の進展に伴ひ、大正十年法律第三號を以て、此の變則を改め、臺灣にも原則として內地の法律を施行し、例外として總督の命令に依ること、なつた。

然しながら、風俗習慣の相違してゐる等本島特殊の事情によつて、認められてゐる所の特例や特別法制も尙ほ決して少くはない。彼の匪徒刑罰令の如きは特例中の主なるものであり、知事又は廳長をして、民事爭訟の調停及び其の執行を取扱はしめてゐる制度や、郡守、支廳長又は警察署長をして、比較的輕微な犯罪事件を卽決せしめてゐること等は特別法制中の顯著なものである。

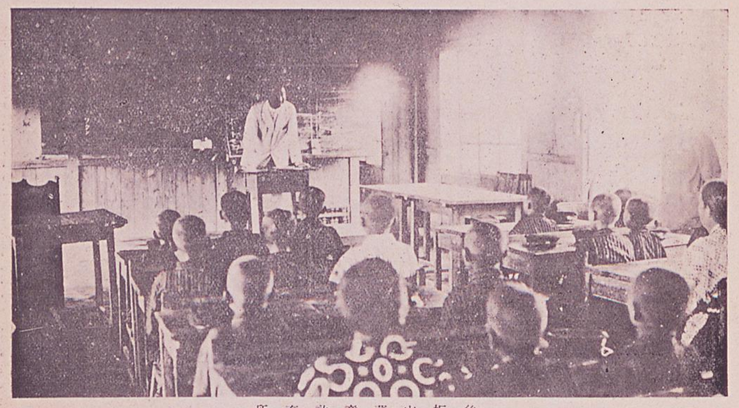
〔司法機關〕 臺灣總督府法院は總督に直屬して、民事刑事の裁判及び非訟事件に關する事務を掌る。法院を分つて地方法院と高等法院とし、高等法院には覆審部と上告部とがある。

地方法院は判官三人の合議と單獨との兩制であつて、其の所管區域の民刑事に就て第一審の裁判をなし、又刑事の豫審及び非訟事件に關する事務を取扱ふ。

高等法院の覆審部は判官三人の合議制であつて、地方法院の裁判に對



開山神社（鄭成功を祀る）



角板山蕃童教育所

する控訴と抗告とに就て裁判し、其の上告部は判官五人の合議制であつて、終審としては上告、高等法院覆審部の決定及び命令に對する抗告、地方法院の爲したる上告棄却の決定に對する抗告及び第一審を以て終審とする皇室、內亂、外患、國交に關する罪、匪徒刑罰令に規定してある罪等に就て裁判する。

高等法院は臺北に、地方法院は臺北、臺中、臺南の三市に設けられ、他に地方法院管轄內に支部三、出張所三十を置き、前者は地方法院の事務の一部を、後者は登記公證の事務を取扱ふ。

各法院に檢察局を附置する。檢察局は總督に直屬し、各檢察局に檢察官を置き、司法警察官を指揮監督し、刑事の追訴を爲し、裁判の執行を指揮監督し、且法院所轄事務に係る民事訴訟に付き國を代表する。

〔警察制度〕 本島警察の中央機關としては、總督府に警務局があり、全島の警察機關を監督し、其の統一を圖つてゐるのであるが、今日では從來の警察官を以て組織するの制を改めて一般の文官組織とし、僅に其の內の理蕃課が例外を示してゐる。

州には警務部を置いて、事務官を其の部長に充て、州の下に郡を置いて郡の長たる郡守には警察權をも與へ、警察課を設けて警視又は警部を其の課長としてゐる。又廳には警務課を置いて警視を其の課長に充て、廳の下に支廳を置いて、警視又は警部を其の支廳長となして、以て廳長の事務を分掌せしめる。此の他に臺北、基隆、臺中、臺南、高雄の五市には警察署を設けて、其の署長には警視を配置してゐる。

處で玆に本島保安の機關の中で、特筆すべきものに保甲制度と云ふものがある。此の制度は古く支那に行はれたもので、本島に在つては清朝時代に曾て之を襲用したことがあり、明治三十一年八月中、更めて警察の下級補助機關として制定されたものである。其の組織は、家十戶を甲と云ひ、十甲を保と云ふ。故に一保は百戶より成つてゐる。保甲の役員は保正と甲長とであるが、孰れも公選の上、州知事又は廳長の認可を經るもので、總て名譽職である。此等の役員は、區內の安寧秩序を保ち、戶口を明かにし、市井無賴の子弟を教戒し、善を勸め惡を懲らし以て其の區內を肅淸し、治安を維持する責任とするものである。

又匪徒若くは風水火災等の警備防禦の爲には、一保若くは數保を合して一壯丁團を編成せしめる。壯丁團は普通十七歲以上五十歲以下の品行善良、身體强健な男子を選拔して之を組織し、一朝事あれば、直に團體を成し警備に當らしめる。是れ一種の自治警察とも稱す可きもので實に本島特有の制度である。

〔理蕃〕警務局の事務の一つに尚ほ理蕃の事がある。由來、蕃人は本島土著の住民で、明朝の末年頃から漢民族に逐はれて、漸次、深く山嶽地帶の間に隱棲し、現代文明とは全く沒交渉な原始的生活を送つて來たもので、往年は首狩等の蕃風を存して人の畏怖する所であつたが、今日では、教育に授産に醫療に、著々撫育教化の實を擧げて、其のアミ族の如きは本島人と同樣、地租を納めて居る者四萬人の多きに達する。タイヤル族の一部には、性撫猛にして、今尚ほやゝもすれば仲間の内で互に爭鬪を爲す者人が無いでもないが、其の數は僅少である。大體から見て蕃人は、決して恐るべきものでなく、寧ろ内地人に對して親愛尊敬の念を懷いてゐる。義氣に富み武勇を尚ぶ純眞なる性情は本島人に比して、其の改風移俗の速かなことは驚く計りである。

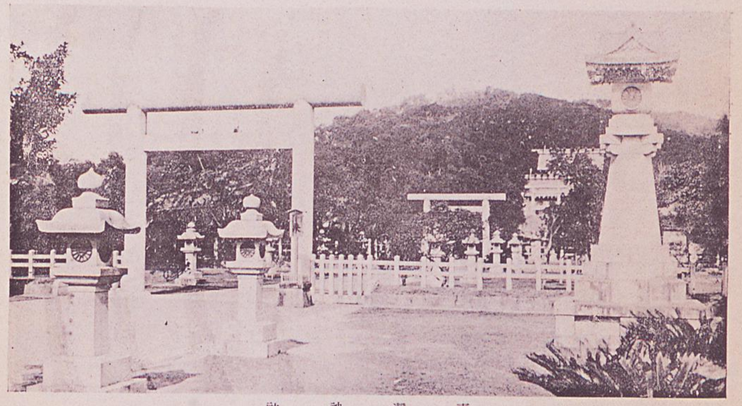
宗教

〔神社〕臺灣の神社は總て領臺後に祀られたもので、臺北の官幣大社臺灣神社、臺南の官幣中社臺南神社を始めとし、全島を通して縣社六、無格社十一がある。祭神には、國土經營の神である大國魂命、大巳貴命、少彦名命竝に本島平定に最も御緣故の深い北白川宮能久親王を奉祀したものが多い。

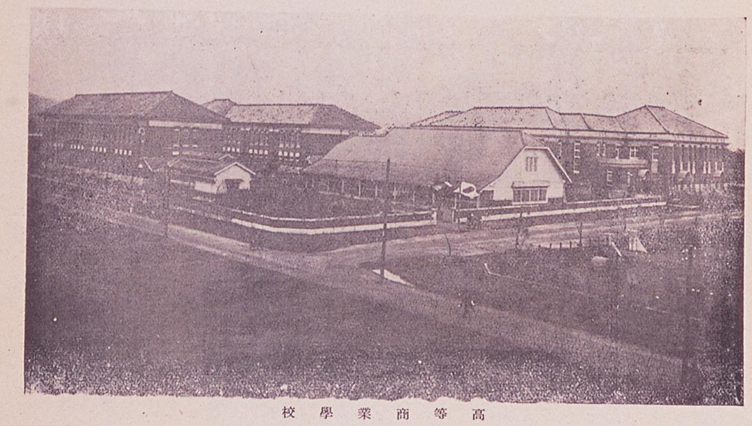
〔宗教〕本島の宗教には、本島人に固有のものと、外來のものとの二種類がある。固有の宗教には儒教、道教、支那傳來の佛教及び齋教等があり、現に三千四百餘の數多き寺廟、齋堂がある。孰れも明末以後に南支那から移住した者に依つて傳へられたもので、其の形式内容共に福建、廣東に於けると略ほ同一であるが、而も之等各教は互に混淆して殆と其の純なるものは認められぬ。此の他に神佛又は祖先祭祀を以て團體存續の目的とする神明會、祖公會等の宗教團體が六千餘もある。

外來の宗教は神道、内地傳來の佛教及び基督教である。神道及び内地傳來の佛教は共に領臺後内地から傳來したもので、各地に布教所を設いて夫々布教傳道に努めて居り、現在二十九の寺院と百七の説教所とがある。基督教には領臺前歐米人に依つて傳へられたものと、領臺後内地人に依つて傳へられたものとがあり、現に教會堂、説教所を合せ百九十五に達してゐる。

由來本島人は迷信が甚だ強く、其の陋習の容易に拔くべからざるものがあるけれども、近時稍〻覺醒の機運を示し、内地佛教と連絡して、臺灣佛教の興隆を圖るもの〻多くなつて來たことは喜ばしい。但し基督教に在つては、歐米宣教師が專ら本島人の布教に從事してゐるに反して、内地宣教師の布教が尚ほ全然内地人の範圍を出て居ないことは遺憾である。



臺灣神社



高等商業學校

教育

臺灣に於ける教育事業は、歴代總督を始め現任總督の最も力を注いでゐる所である。領臺後、本島人の教育を開始したのは、明治二十八年芝山巖(臺北の北方約二里)に學堂を設けたのが始まりで、以後全島の主要地に國語傳習所を開いて、主として國語の教授をした。明治三十一年には國語傳習所を公學校に改め、益々其の增設を圖つたのであつて、之が確て今日の發展を致す基となつたのである。

爾來、臺灣の教育令は再度の改正を經て、大正十一年二月制定の現行學制を見るに至つた。卽ち之によれば、原則として内地の學制に則り、臺灣特殊の事情あるものに就いて特例を認めたもので、内地人、本島人、蕃人の別なく均しく何れの學校にも共學することの出來るのが本體である。唯だ特例として初等普通教育に於て、國語を常用する者と否とに依り小學校と公學校との區別を設け、從つて師範學校に於ては小學公學の兩師範部の制を定めてゐる。其の他は高等普通教育、實業教育、專門教育等皆其の種類も程度も内地と同一である。

大正十四年四月末日現在の小學校數は分教場共百三十三で、公學校數は分教場共七百二十六。小學校就學兒童數は二萬五千百五、其の就學歩合約九十七人であつて、公學校就學兒童數は二十四萬一千九百八十五、其の就學歩合は漸く約二十九人に過ぎないが、之を六年前の大正七年度の十五人七分に比較すれば、寧ろ長足の進歩と云はねばならぬ。其の他、内地と同樣の公、私立幼稚園が三十九園、また本島傳來の書房と稱する寺小屋式の私立學校等も若干殘つてゐる。

高等普通教育に於ては中學校數九、其の生徒數三千五百八十四、女學校數十一、其の生徒數三千九百三十六である。他に七年制の高等學校一、其の生徒數百六十五がある。實業學校は校數四、其の生徒數千五百十七で、他に實業補習學校十六、其の生徒數八百三十六があり、師範學校は三校で其の生徒數千七百三十六である。

專門教育に於ては醫學專門、高等商業、高等農林及び齊制度に依る商業專門の四校、其の生徒總數七百八十八であるが、更に近く大正十七年度からは、臺灣として特色のある大學が開講される筈になつてゐる。

尚ほ、蕃地に於ける蕃童の教育機關としては蕃童教育所を設け、警察官をして之が教育の任に當らしめてゐる。大正十三年末現在の教育所數

百七十四、其の生徒數は四千四百五十六で、この卒業生の中には更に醫學專門學校、師範學校、工業學校等を卒業した者さへある。

衛生

領臺當時、本島人は未だ衛生觀念といふものを有しなかつたので其の頃の臺灣が所謂瘴癘蔓延、惡疫流行の地であつたことは事實である。

仍て、總督府は當初から大に此の點に意を注き、衛生の工事施設や其の取締など極力改善に努めた結果、今日では各主要都市の殆と全部に上水道と下水道とが敷設せられ、其の他市區の改正を行ひ、住宅の改良を施し、又公設市場を設けて新鮮な魚菜を供給する等、總ゆる文明的衛生設備を見るに至つた。

一面、醫療機關としては、各主要都市に官設の醫院を設き、其の數十二を數へてゐるが、中にも、首都臺北醫院の如きは建築諸經費三百萬圓を投じたもので、實に東洋第一と云はれてゐる。其の他官設醫院の設けの無い地方の爲には、公醫制度を認め、現に派出の公醫數は百六十二名に達してゐる。此の他、全島に亙つて多數の私立醫院や開業醫があることは勿論である。

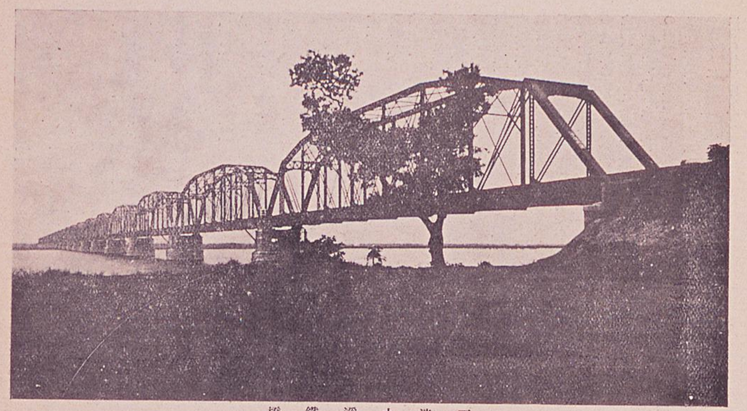
而して之が爲に、マラリアの如きも、既に都市に於ては殆と禍病者を見ないまでになつた。斯くの如き好衛生狀態は、總督府の諸種の施設中特筆に値するもの丶一つであつて、植民地生活は爲に全く安全の域に達したものである。

交通と通信

〔海運〕 領臺以前、本島の航海權は英商ドグラス汽船會社の獨占であつたが、領臺後總督府は直に、大阪商船と日本郵船との二會社に補助金を與へて、內地及び支那方面に定期航海を命じたので、外國汽船も終に廢航するの已むなきに至つた。然しながら本島の海運は尚ほ山下汽船を加へた三社の命令航路以外に見る可きものがない譯で、大正十四年度の命令航路は左の通り（括弧中の商船とあるは大阪商船、郵船とあるは近海郵船を略したものゝである。

基隆神戸線（商船及郵船）一萬噸級及六千噸級各三艘、毎月十二回
高雄横濱線（商船、郵船及山下汽船）三千噸級六艘、毎月六回
沿岸線（商船）本島沿岸主要地を連絡し東沿岸及び西沿岸を往復
北支那線（郵船）高雄天津間
南支那線（商船）三線あり甲、基隆香港間乙、高雄廣東間（丙）基隆福州間

臺北醫院



淡水溪鐵橋

南洋線（商船及山下汽船）三線あり孰も基隆を起點として夫々バタビヤ、西貢、暹羅、海防間

〔道路〕 領臺以前の本島の交通は、頗る不便であつて、道路、橋梁等も殆と施設として見る可きものがなかつた。今日臺灣の西部を南北に縱貫してゐる所の、所謂縱貫道路の如きも、實は明治二十八年我が工兵隊が軍道として開いたのが始まりである。爾來國庫又は地方費を以て此等主要道路の開鑿改修を行つた結果、今や漸く內地の國道に準ずる可きものが百十六里、府縣道に準ず可きものが六百四十四里、市町村道に準ず可きものが二千九百十九里となつた。

然しながら、臺灣特有の河川の亂流には架橋に非常な費用が掛り、財政の關係上地方道路は架橋出來ぬ爲、交通甚だ不便であるけれども、臺北、臺中、臺南市の樣な主要都市は坦々たる大道が通じて、市街附近亦自動車の交通に差支ない。殊に南北縱貫道路は國費を以て改修中で、數年の後には大部分の連絡が取れる見込である。

〔鐵道〕 清領時代、基隆から新竹に至る六十二哩の鐵道が有つたけれども、殆と實際の用を爲さず、今日の鐵道は全く領臺以後の新建設と云つてよい。即ち大正十三年度現在では、官設が縱貫線二百四十九哩、支線、臺東線及び阿里山線を合せると五百五十餘哩に達し、此の他に主として製糖會社の經營する私設營業線三百十四哩がある。而して尚ほ現に新線路の建設を進めて居る計りでなく、在來の線路にも改善を加へて益交通運輸の圓滑を圖らうとしてゐる。又私設鐵道の發達を促す目的を以て、一定の條件の下に補助金を下付すること丶してゐる。

此の他に、本島の有力な補助交通機關として、臺車と呼ばれてゐる所の特有の簡易私設軌道があり、其の營業哩數は實に五百八十七哩、臺灣の交通網はこを俟つて初めて能く完成されてゐるかの觀がある。

〔郵便、電信、電話〕 通常郵便、小包郵便等內地と全然同一の制度で特に云ふ可きものなく、郵便貯金は大正十三年度に於て、預入人員四十九萬三千四百七十六、其の金額九百十六萬一千百九十圓であり、郵便爲替及び振替貯金を合し同年度に於て、振出拂込口數百七十八萬三千二百七十二、其の金額七千四百九十九萬八千六百二十圓を示してゐる。

內地との間の電報は、淡水、那淵間外一線、淡水長崎間の二線の海底線と基隆及び鳳山の無線電信と相俟つて疎通してゐるが、無線電信は近く更に大增張を見て、內臺間通信の完全を期することになつてゐる。尚ほ電話は大正十三年度來現在加入者一萬一千百七十九、全島を通じて自由に交換通話することが出來る。

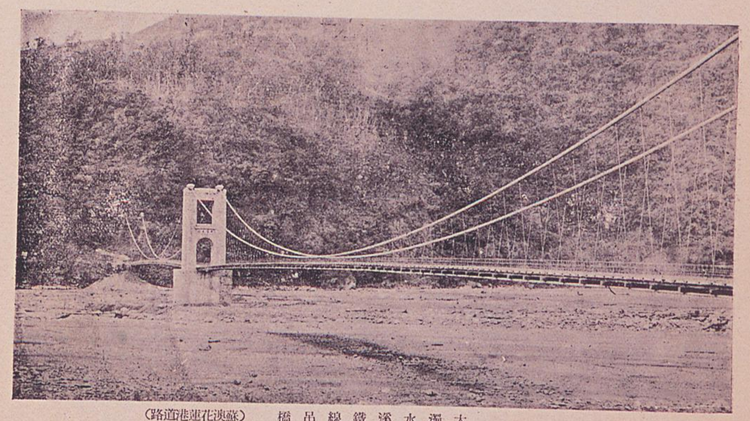
土木工事

領臺以來、市區の改正、水道、下水、河川の改修等土木工事の見る可きものは甚だ多い。之に依つて衞生、勸業等のことは大に進められたのであつて、島内主要都會の如きも亦、漸く文明都市としての體面を備ふるに至り、中に本首都臺北市の如きは、街路、建築物共に整備して、内地の都市にも其の比を見ず、近代都市として實に羨しからぬものである。併し今茲に之等各般の土木工事を詳述することは之を略して、其の内の主要な二三に就て說明を加へよう。

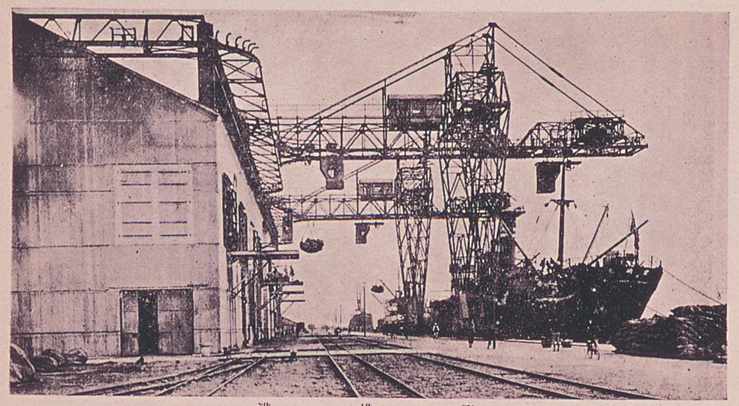
〔埤圳〕 埤圳とは灌漑排水の施設を謂ふので、本島に在つては領臺以前から存はれ、其の古いものは二百年を經過し、灌漑面積の廣いものには一萬甲(甲は略ほ町歩に近しい)を超えるものさへあつた。領臺後は公共埤圳規則を定め、更に之の助長を圖ると共に、總督府も自ら進んで其の施設經營に當ることゝなつて、既に其の完成したものに臺中州の葫子埤圳、后里圳と高雄州の獅子頭圳等があり、現に工事中のものに桃園埤圳がある。然しながら其の規模の最も大なるものは、民營でこそあれ嘉南大圳であつて、總督府の補助一千二百萬圓を合せ總經費四千二百萬圓、大正十五年には完成の豫定になつてゐるが、蔗、完成すれば臺南州下の旱魃と排水不良とに苦められてゐる看天田、甘藷園其の他の土地十五萬甲を化して、稻、甘藷耕作の適地とすることが出來る譯である。此の他にも公共埤圳、認定外埤圳等で相當大きなものが少くない。

〔電氣〕 大正十三年末現在の電力會社は其の數八、總發電力二萬四千百餘キロワットであるが、就中最も大なるものは臺灣電力株式會社で、資本金三千萬圓、其の發電力は一萬五千餘キロワットである。同會社は大正八年八月に設立されたものであるが、其の前身は即ち臺灣總督府作業所であつて、設立と同時に、更に約十四萬キロワットの電力を得て各種産業上の勤力と爲す計畫の下に、臺中州下の日月潭に於て水力發電の大工事に著手したのである。所が當初の計畫に幾分齟齬の嘆もあり、其の後財界に變動等もあつた結果、工程半ばにして工事中止の已むなきに立至つてゐることは頗る遺憾と云はねばならぬ。

〔築港〕 條約上の本島の開港場と云ふのは、淡水、基隆、安平、高雄の四港であるが、島の輪廓は極めて平凡で、海岸線は短く、殆と自然の良港灣と稱す可きものがない。此の缺點を補はんが爲に、北の基隆と南の高雄とに大築港工事が起され、現に本島港灣と云へば、唯だ此の二港に限られてゐるかの觀を呈し、島外との貿易、交通連絡の最大部分は此



大渴水溪鐵線吊橋　(蘇澳花蓮港道路)



高雄港

處で行はれてゐる。左に此の兩港の現狀と、築港工事との概況を說明しよう。

基隆　基隆は本島の北端に在つて、島内最大の要港である。我が領有の當時に在つては、冬季は北東の季節風に災ひされて浪高く、灣内の水も淺くて千噸内外の汽船さへも、沖合約一里の外から入ることが出來なかつた。仍て明治三十二年に港内一部の淺渠埋立工事を起し、爾來數回、規模を擴張して之を繼續し、近く大正十八年には竣、既定計畫の完成を見る筈である。之に費した所の歲月は實に二十有八年、工費の總額は二千五百二十三萬餘圓であるが、此の工事が竣成すれば、千四百十七間の防壁には三千噸級乃至一萬噸級の船舶十五艘を繫留し、浮漂の六艘とを合せて、都合港内同時に二十一艘の大船を收容することが出來るのである。此の他、三千噸級と一萬噸級との二船渠を設けて、船舶の修理に應じ、陸上設備としては、鐵道の防壁連絡、上屋、倉庫、起重機、運河、舗道其の他必要な設備が整ふことになり、竣成後に於ける防壁荷役能力は一箇年百八十萬噸である。而して着手當時から大正十三年迄に竣功した防壁九百二十二間に六千噸級以下三千噸級までの船舶十隻と、浮漂の六隻とを合せて港内同時に十六隻の大船舶を繫留することが出來る。其の他既成の重なる設備は上屋、倉庫、防壁連絡鐵道、起重機、運河、三千噸級の船渠等である。

本港港勢の發展は驚くべきもので、築港工事未だ半ばであるのに既に大正十三年度に於いて貿易額は一億九千九百三十二萬三千四百四圓、其の出入貨物噸數は二百六萬九千三百一噸に達してゐる。

高雄　高雄は南部臺灣に於ける唯一の要港で、輻八百間、長さ三里に及ぶ所の高雄灣の内側に在る。灣は西北端に於て僅に開け、天然の良港を爲してゐるが、其の大部分は頗る淺く、且つ港口附近に處々岩礁と淺瀨があつて、小蒸汽船でも、僅ほ其の出入が自由でなかつた。そこで明治四十一年から十八箇年の繼續事業として、經費一千七百餘萬圓を以て大築港に著手することゝなつたもので、一萬噸級までの船舶を防壁に碇泊せしめ、水陸の連絡を完備して、一年九十萬噸の貨物を吞吐することの出來る樣にしやうと云ふのである。現に港口の岩礁は取除かれて、四百八十間の防壁には八千噸級以下の船舶六艘、港内繫留浮漂にも亦同じく六艘を繫留することが出來る。本築港工事は財政の都合や、物價騰貴による工事費不足のため、豫定計畫の大半をなしたに過ぎないけれども、港勢の發展急であつて大正十三年度に於ける貿易額は一億六千九百一萬八千六百五十七圓、其の出入貨物噸數は既に百十六萬八千二百四十

四噸に達してゐる。

産業

領臺以來三十年、本島に於ける文化は、上に述べ來つた樣に、全く驚異す可き程の進步發達を遂げて居るが、中にも産業方面の如きは、其の最も長足の進步を示したものゝ一つで、明治三十三年には總生産額未だ五千萬圓を超えなかつたのが、今日に於ては年額五億五千萬圓、卽ち十幾倍と云ふ素晴らしい進展振てある。今其の概要を説明する前に之の趨勢を數字で示すと左表の通りである。（單位千圓）

	大正十三年	大正三年	明治三十三年
農産	二五三、七二二	八〇、七七四	三一、八〇〇
工産	二六六、四七〇（内專賣品三〇、一五三円ヲ含ム）	六八、八七〇	一五、七六〇
鑛産	一三、三八〇	四、五五〇	六〇〇
水産	一六、六〇〇	三、二一〇	六二〇
林産	一一、五〇〇	四、三〇〇	―
計	五六一、六七二	一六一、五七四	四八、七八〇

備考　農産價額中には甘蔗生産價額、粗製茶製産價額を工産價額中には砂糖製産價額を含む。

〔農業〕　農業は本島の各種産業中最も重要の位置を占めて、大正十三年の生産總額は二億五千三百七十餘萬圓、其の耕地面積は七十八萬五千甲、之に從ふ農民は約二百三十萬人に上り、本島總人口の約六割弱に當つてゐる。農産物には米、甘蔗、芭蕉（バナヽ）、茶、甘諸の五大農産を始め、其の他落花生、豆、麥、胡麻、煙草、苧麻、黄麻、蜜柑、鳳梨（パインナップル）、蔬菜等がある。

米　本島は米作に適し、島内の大部分は年二回の收穫をすることが出來る。我が領臺以來、其の品質と云ひ、其の耕作方法と云ひ、大に面目を改めて大正十三年には産額六百餘萬石、其の價格一億三千七十餘萬圓に上つてゐる。

殊に最近來、全島に亙つて内地種米の栽培熱が高まり、今後益々普及される狀勢に在つて、大正十四年は約百萬石を産し其の大部分を内地に移出してゐる。在來種米に比して其の品質は遙に優良で、從つて四割乃五割至高に取引される。

芭蕉　強烈な光熱に惠まれた本島は、多種多樣の園藝作物に適して、さながら天然の溫室であるかの感がある。中にも芭蕉は本島に於ける嵜果物の王である計りでなく、農産物中に在つても米、甘蔗に亞ぐ重要品

芭蕉園

甘蔗園

て、大正十三年の生産額は二億九千百餘萬斤、其の內輸移出額一億九千萬斤、價格一千百九十九萬餘圓に上つて居る。其の生産は中部に最も多い。

甘諸　本島に於いては米に次ぐ處の主要食糧作物であり、又家畜飼料としても重要な位置を占めて居る、島內何れの地方にも産し生諸以外に切干諸（蕃薯簽）として內地に移出されアルコール、燒酒等の原料とされてゐる、大正十三年の産額は十八億六千七百餘萬斤である。

其他　各種農産物に就いて大正十三年の産額を見れば落花生が四十一萬三千石、豆類が九萬六千石、胡麻が一萬二千石、黄麻が六百萬斤、苧麻が二百萬斤、泥藍が二百二十萬斤、煙草が二百十萬斤、柑橘が二千百萬斤、鳳梨が一千百萬箇、龍眼が一千百萬斤、木瓜が三百二十萬斤、西瓜が八萬五千箇等であつて、中にも鳳梨の如きは品種の改良に連れて、其の將來が一般に期待されてをる。

畜産　牛は本島農業勞力の主要要素であつて、農家一戸當り平均一頭を飼育してゐる。水牛と黄牛とが主であつて、其の飼育割合は水牛三に對して黄牛一に當る。大正十三年末に於ける水牛の飼育頭數は二十八萬六千七百餘頭、黄牛は九萬二千四百餘頭、洋牛、印度牛及び雜種牛は三千七百餘頭である。水牛、黄牛共に因習の上から全然食用に供されて居ないが、質から云つても亦之に適しない。

本島には養豚が盛んで一般に普及され、農家一戸當り三頭强を示してゐる。勿論食用に供するものであつて、大正十三年末の飼育頭數は百三十四萬餘頭に上つて居る。

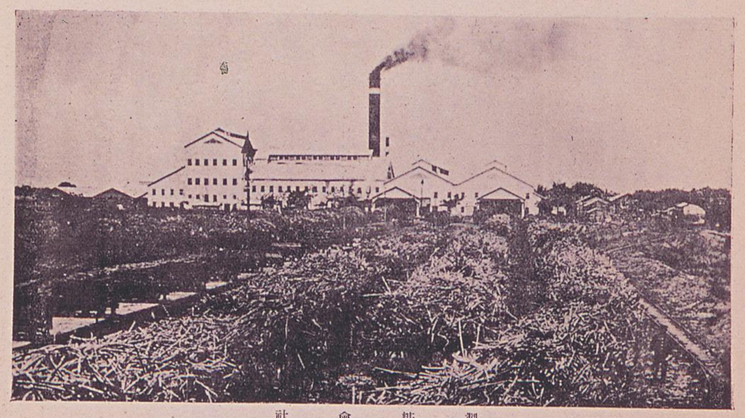
（農業中、甘蔗及び茶に關する事項は次に項を改めて糖業及び茶業中に記述する）

〔茶業〕　本島の茶は春夏秋冬に亙り、主として北部の畑地若くは山地に産出するが、其の製法に依つて烏龍茶、包種茶、綠茶、紅茶等に分れる。其の生産は氣家、市況等に依つて年々增減はあるが、是亦總督府の奬勵の結果、大勢に於て作付收量共に增進し、大正十三年は作付面積四萬七千百九十甲、生産粗製茶二千六十三萬餘斤に達してゐる。而して紅茶と綠茶とは未だ僅少で、大部分は烏龍茶と包種茶の兩種である。烏龍は主として北米合衆國、包種は主に爪哇其の他南洋方面に輸出せられるもので、大正十三年の輸出は烏龍茶八百五十二萬餘斤、價額四百八十六萬餘圓、包種茶七百二萬餘斤、價額五百四十五萬餘圓に上り、外に兩種茶の內地に移出されたものが約四十萬圓計りである。卽ち本島の茶は舊來殆ど海外市場を對手とする特産品で、對外貿易品の最重要の地位に在るのである。故に總督府に於ては益々其の生産の增加、品質の向上、

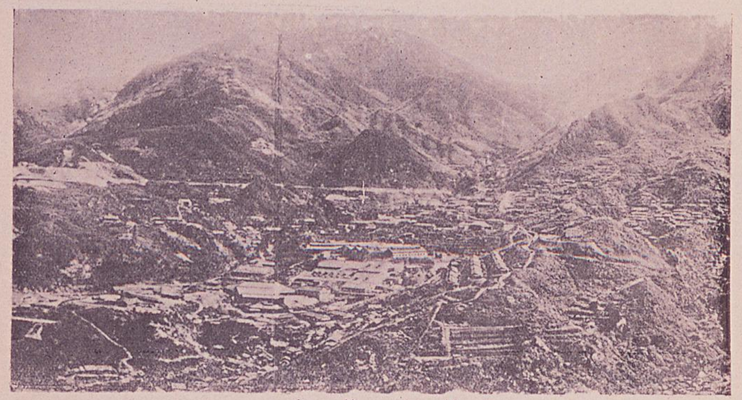
販路の擴張等、農工商各方面の改良施設に努めつゝある。

〔漁業〕 漁業は過去三百年來本島産業殖に貿易の大宗として、重きを成して來たものであるが、我が領臺當時迄の斯業は頗る原始的で、劣惡な甘藷の粗放極まる耕作と、水牛を以て動力とする小規模の舊式製糖場に依て製造せられ、品質劣等な赤糖を生産するに過ぎなかつた。に故總督府では、明治二十九年に布哇から優良甘藷種苗を輸入して繁殖を圖り、次で明治三十五年に砂糖農工業各方面の改良奬勵方針を確立し、糖務局を設置して糖政各般の施設機關とした。而して其の奬勵方針は、當初五年間は工業方面に重きを置き、大規模最新式機械工場設立を奬勵し、一面過渡期の一階梯として、甘藷の壓搾に機械力を以てする稍大規模の一部新式製糖場設立を奬勵し、旁ら原料甘蔗の改良增殖を圖つた。玆に於て本島糖業勃興の機運勃然として起り、新式製糖場の各地に設立せらるゝもの相次で現はれ來つたので、明治三十八年取締規則を發布して、原料採取區域の制を定め、原料の爭奪を防ぎ、一面蔗農の利益を確保することゝした。越えて明治四十年度からは、優良なる甘蔗を多量に供給せしむるの必要に迫られたので、奬勵の主力を農業方面に移し、工業方面を從とし、各般の施設に努めた。斯くて優良蔗苗の輸入、本島特有の優良實生種の育成、大規模官營苗圃に依る純潔健全な蔗苗の育成配付、肥培管理其の他總ゆる耕作法の改善等に依り、蔗園收穫面積は明治三十六年の一萬六千五百餘甲から、大正十三年の十二萬三千餘甲に進み、其の甲當收量は、同期間に四萬一千餘斤から、六萬三千餘斤に增進し、總收穫高は同期間に六億八千三百餘萬斤から、七十七億九千三百餘萬斤に上つた。一面製糖場は、領臺當時皆無であつたが、今日では新式大規模の會社數十四、資本總額二億八千百二十萬圓、現在工場四十五、一晝夜の甘蔗壓搾能力合計三萬九千四百九十米噸、外に一部新式のもの二十箇所、能力一千六百二十噸を算し、舊式のものは當初の一千有餘箇所から現在百數十箇所に減じた。從つて砂糖の生産は、領臺當時劣惡な赤糖七、八十萬貫であつたものが、大正十三年には七百五十三萬六千餘萬瓩に上り、而かも其の九割七分は、品質最も優秀な白糖及び分蜜糖で、其の大部分を母國に供給して、將に砂糖自給自足の域に達せんとし其の一部を海外に輸出し、移輸出總價額は實に一億二千六百餘萬圓に上つてゐる。尙最近兩三年の趨勢は、農業方面の改良進歩著しく、甲當收穫は比年、增進し、近く十萬斤に達すべき見込で、砂糖の生産も逐年益々增加しつゝある。

〔工業〕 本島の工業は未だ到底農業の如く盛んでなく、寧ろ大に今後の發展に待たねばならぬ次第であるが、現在も、農産加工業、釀造業、



製糖會社



金瓜石鑛山

土木建築材料の製造業、並に家内工業等は相當發達の域に達して居る。また機械製作業、化學工業等は戰後財界の好況に乘じて續々創始せられたが、目下の不況に際しても、漸つて其の試練を受けつゝあり、其の將來は大に刮目される。大正十三年に於ける此等工産の總價額は二億六千六百餘萬圓(內專賣品三千十五萬餘圓)を多かむである。

之を細別すれば**農産加工業**としては、糖業、製茶、檬酸を始とし製粉、鳳梨罐詰等である、**釀造業**には酒類、麥酒並に酒精があり、**土木建築材料製造業**にはセメント、煉瓦、製材、石灰等の各工場があり、また**家內工業**には製帽、木工、月桃細工、製筵、製紙、製麵、製粃、蓆草紙、禮拜紙、線香、蠟燭、造花、金銀珊瑚細工等がある。

又近年基隆、臺北、高雄等に於ける**機械製作工業**は其の規模を擴張して、造船、製糖機械の製作、大型の汽罐、汽機並に諸機械を製出するに至り、製紙、調合肥料、硫酸、過燐酸肥料、礦物油、豆粕、石鹼、カーバイト等の製造**化學工業**も各地に續々として出來た。

最後に**紡織工業**に於て、黃麻の紡織のみは早くから發達して居つたが、苧麻、木綿の紡績、絹絲の製造は極めて最近のものである。其れにも拘らず成績は頗る良好であるから其の將來は有望であらう。

〔鑛業〕 本島に於て採掘の許可されてゐる鑛物は金、金銅、金銀銅、砂金、銅、銅硫化鐵、水銀、砂鐵、石炭、亜炭、石油、硫黃、燐礦の十三種であつて、大正十三年に於ける此等の鑛物の總産價額は一千三百三十八萬餘圓である。中で最も重なものは石炭、金、銅、石油、硫黃であるから以下之を略説しよう。

石炭 炭層は極北部に於て最も發達し、此の地方の産炭は全島産額の約九割を占めてゐる。領臺當時に在つては採掘振はず工業の發展上、一つの故障とされて居つたのであるが、今から約二十年前、新式の採掘機械を用ふるに至つて、俄かに其の發達を見、殊に最近數年來、産額が著しく增加した。其の質も多くは內地一等炭に讓らず、大正十三年の産額は百五十萬餘噸で其の價格は一千百六十四萬餘圓、現に南支、南洋方面に向つて盛に輸出せられ、大正十三年の輸出價額はバンカーを加へ九十九萬餘噸其の價額一千五十二萬七千餘圓に上つて居る。

金 本島に砂金を産出することは、遠く十三世紀の初めに於て既に知られて居つたものであるが、現在の金鑛は光緒十九年(明治二十六年)に發見せられ、領臺後金瓜石及び瑞芳に金鑛鳳設定されて忽ち本邦有數の金山として其の名を馳するに至り、其の後既に三十年を經過したものであるが、是れ亦極北部の産で、大正十三年の産額は約七十貫、其の價

苗栗出礦坑石油礦場

額三十八萬餘圓であつた。

銅及銅鑛 これも約二十年前、金の鑛區から發見したもので、大正十三年の產額は三十七萬八千餘斤、價額十九萬五千餘圓、銅鑛及び金銅鑛は同じく產額六百三十餘萬貫、其の價額八十一萬餘圓である。

石油 その發見は遠く六十年前であつて、淸朝時代に一度經營して失敗中止の儘であつたのを、約二十年前に復興したものである。其の分布は西部、中部、南部に亙り、既に發見した油田の兆候は三百箇所を超えて居つて、前途益々有望である、大正十三年の產額は一萬九千餘石、其の價額も二十八萬三千餘圓に達した。

礦黃 支那に於ては之を俗硫黃と稱へ、西班牙人の占據以前から邦人の手に依つて採製せられたものである。其の產地は主として極北部の大屯火山麓で、大正十三年の產額は三百十三萬餘斤其の價額三萬九千餘圓である。

〔林業〕 山嶽が總面積の三分の二を占めて居る所の本島では森林に於ても亦、大に見る可きものがある。尤も、低地に近いものは、前の時代に於て林政宜しき得ず、濫伐を恣まゝにした結果として殆ど盡く禿山となり、其の跡の植林といつても我が領有以後のことであるから、未だ問題とならぬ。從つて大森林らしいものは皆、是れまで平地人の窺ひ得なかつた高山帶地に殘されてゐる譯である。

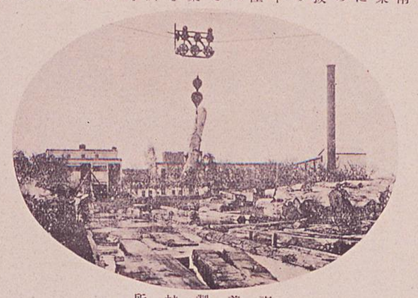
其の大きなものになると、概ね一萬尺內外の高山であるから、土地の高く寒るに連れて、熱帶林から暖帶林となり、溫帶林となり、寒帶林と

基隆炭礦田寮港第一坑

までなつて、各地帶の樹木が網羅されてゐる。中にも最も大きいのは阿里山、八仙山、太平山の三であつて、現に官營斫伐事業を行つて居る所である。大正十三年の木材賣拂高は合計約二十四萬三千二百四十五石、此の價格二百九十六萬五千五百七十一圓である。

右三大森林の中で、太平山の名も近時漸く世間に現はれて來たが、更に早くから內外人の注目を引いて來たのは、彼の阿里山であつて、其の山相の卓絕してゐると、其の產材の優良豐富であると相俟つて、恰も本島の代表的森林であるかの觀を呈して居る。

阿里山 は臺南州下嘉義驛の東方四十餘哩の所に在つて、新高山の西側に連り、海拔八千七百尺、其の總面積は一萬七千六百餘町歩で、僅に一千五百町歩の草生地を除いては、悉く針葉、濶葉の樹木である。そして其の立木材積は、今日に於て尚利用可能のものが八百五十萬石以上と云はれる。一旦民營に委ねたのであるが、成績が思はしからず、明治四十三年に豫算四百九十萬圓で之を官營とし、以て今日に及んで居る。木材運搬の爲には、延長四十五哩の阿里山鐵道があり、八千尺の山巔へ登つて行く所の森林鐵道であつて、山腹を旋轉し、峻坂を攀上して行く、途中の壯觀は、內地に於ても將た海外國に於ても多く其の類を見ることが出來ぬ。其の他伐木、集材から製材に至るまで、現機の大きな且最新式のものであることは云ふまでもない。大正十三年度の斫伐十六萬七千石の內、賣拂數量は十四萬六千三十四石餘、其の價額百八十六萬



嘉義製材所

阿里山檜林

二千七百八十六圓餘であつて、太平山と共に前途益々發展の機運に在る。

以上官營三大森林の他には、尚ほ廣大な帝國大學演習林があり、又拂下、豫約拂下若くは貸下等を受けた民營のものがあり、運材其の他の關係から、官民共に未だ全然手が屆かないで居るものに至つては更に頗る多い譯である。

尚ほ總督府は、上述の如く官營直伐を行ふ傍、また勉めて樟腦の原料たる樟の植林其の他伐採跡地又は無立木地の造林を怠らず、大正十三年度末の造林面積は、官營に於て約四萬五千甲、民營に於て約七萬八千甲に及んでゐる。從つて之等廣大なる森林の保護取締が肝要であるから、大正八年以來地方廳に其の取締員を特置して被害を未然に防ぐことに努めてゐる。

〔水産〕 本島の水産業が、年來の頽廢を脱して新式になつたのは、明治四十三年總督府が、其の試驗、調査を直營とした以後のことであつて、此の意味に於て水産は、本島最新の一産業と云ふて差支へない。

爾來總督府は、益々之の調査、研究、奬勵に力を盡し、其の機關として現に殖産局農務課に水産係を置き、漁業試驗船を用ひ、鰹節製造試驗場・養殖試驗所を設け、海洋調査を行ふ等、種々なる方面から斯業の發達を計つてゐる。從つて今日では漁獲物、水産製品、養殖收獲物を通じて其の産額は、直營の前年に比し、何れも五倍乃至三十倍と云ふ激增で、大正十三年の水産總額は一千五百六十萬圓に達してゐる。

漁業 は基隆、高雄の發動機付漁船に依るものが最も盛んで、主要な漁獲物には連子鯛、珊瑚、鱶、鰮、蛸、旗魚、惣田鰹、鰤、鯛、鮎等がある。中にも連子鯛は總漁獲高の一割四分を占めて、臺灣食用魚を代表してゐる。近時漁獲物の增加に伴ふて冬季鮮魚の內地移出が漸く盛んになつて來た。珊瑚は大正十三年五月、基隆を去る三十餘浬彭佳嶼の近海に於て發見されたので一躍して世界的の主産地となつた。種類は桃、赤、白の三種で桃色多く、十三年中の採取高は實に八十萬圓を突破してゐる。

養殖業 は本島に於て古から發達したもので、鹹水池の養殖と、淡水池の養殖とがある。大正十三年末の養魚池總面積は、實に二萬五千甲の廣さに達して居るが、將來尚ほ大に發展の餘地が殘つてゐる。鹹水池は概ね其の規模が大きく、池の面積百甲に及ぶものも少くない、而して其の養魚は虱目魚(Chilk fish)、鰕が主であつて、牡蠣の養殖亦盛である、近來蝦、蟹をも養殖する。淡水池で養殖するのは、草魚、鰱魚等、支那產

淡水養殖場

蘇澳港

の魚類及び鯉である。

貿易、金融及び財政

〔貿易〕 本島の開港場は基隆、高雄、淡水、安平の四港で、別に支那形帆船(戎克)との貿易の爲めに開かれた澎湖、後龍、梧棲、鹿港、東石、馬公の特別開港場六港がある。

領臺以來の貿易の趨勢を見るに、領臺匆々の明治三十年には輸移出入の總額僅に三千百萬圓臺であつたものが、大正十三年には輸移出入の內地貿易と、外國貿易とに分つて比較すれば、今日に於ては前者が頗る高額で、總貿易額の七割乃至八割を占めてゐる。貿易品の主要なるものを貿易價額順に擧げると次の樣なものである。

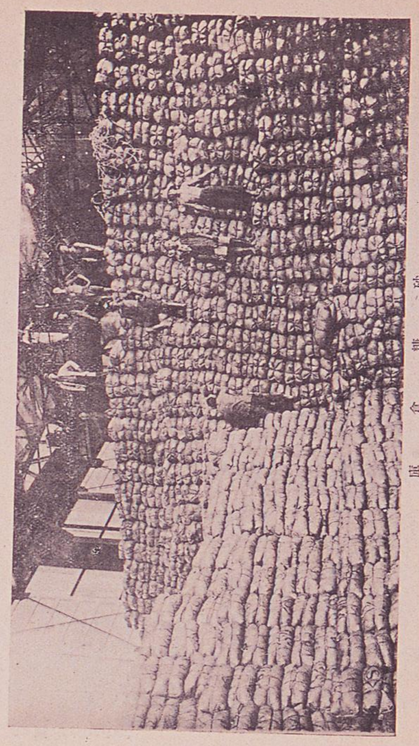
對外貿易〔輸出—石炭、砂糖、包種茶、烏龍茶、鹹乾魚、樟腦、酒精
輸入—油糟、砂糖、大豆、木材、硫安、ガンニー袋、包席

內地貿易〔移出—砂糖、米、芭蕉實、樟腦、酒精、樟腦油、木材
移入—織物、肥料、乾魚等、織、小麥粉、米、紙

貿易額の數字を明治三十年と大正十三年とに就いて比較すると左表の通りで、出入超過は全く相轉倒した計でなく、其の出超額は實に一億二千餘萬圓に達してゐる。

	明治三十年	大正十三年
貿易總額	三二、三六八、六六六	三八、六五〇、二四二
輸出	一二、四五三、三〇〇	四三、三五五、九五五
輸入	一三、九五二、三六六	四五、四三〇、三六
計	二五、四二一、六六六	八八、九九五、九九九
移出	二、一〇四、六四六	二一、〇四六、三三三
移入	三、三三四、四三三	八、六七〇、〇六〇
計	五、四三八、九七九	二九、七一四、三九三
輸移出	一四、八五六、九六四	二五、三七四、九四二、三六
輸移入	一、九二四、〇三〇	一、三三〇、〇二六、〇六六
出超	一、九二六、〇三〇	一二、六四八、〇六〇
入超	—	一、三二六、〇二二

〔金融〕 領臺當時、本島には銀行と稱す可きものがなく、時の通貨には從來使用して來た樣々の種類があり、新に日本銀行の兌換券を加へ、尚各種の補助貨があつて、其の商取引は複雜を極め幣制頗る混沌たるものであつた。內地では明治三十年十月に、金貨本位制が採用されたけれども、本島では舊慣や支那との貿易關係に鑑み、金貨を本位として計算した銀貨を流通することを許し、機會を俟つて金貨本位制の施行を期する



庫倉　博　砂

ことになつたのである。

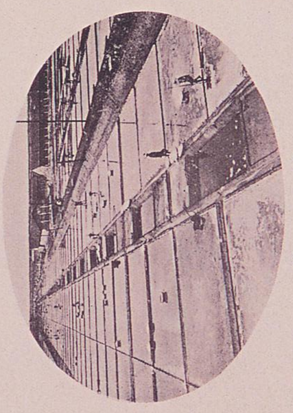
是より先總督府は此の地に特別銀行設立の必要を認め、明治三十年に臺灣銀行法を發布して三十一年六月から其の營業を開始しめ、向本島特別の事情を參酌して、同行に紙幣の發行權を付與したのである。銀相場の變動激しく西貿引せして非常に困難せしめ、あまつさへ投機心を挑發して暴落百出の有樣となり、御度の度々は前期の危惧となつたので一時の應急策として三十年六月臺灣銀行をして臨時紙幣を發行せしめ、其の擬に供へることゝした。其の後四十年に至り銀の價格暴落により輸入の減少を見たので、翌四十一年十月外國銀貨幣及び外國補助貨幣並に粗銀の輸入を制限又は禁止し、一圓銀貨の公鑄をも廢止したのである。他して幾多の變遷を經て極めて困難であり且多年の懸案であつた本島幣制も、切り縮き一圓銀貨の鑄造を行ひ臺灣銀行發行の紙幣を全部回收するなど、始めて所期の目的通に解決することを得、四十四年四月遂に貨幣法を完全に施行するに至つた。爾來本島の幣制は、其の內地と同一制度に統一せられたのである。

臺灣銀行は現在資本金四千五百萬圓で、銀行券發行の特權を有し、日本銀行代理店としての國庫事務、其の他中央銀行の業務を兼ねふと共に、一般銀行の業務を對外信用金融の非常の際も重要な金融機關である。又同行は三十八年以來日本勸業銀行の代理店を付各行の、又大正三年からは農林倉庫信託銀行記帳業も其の營業目に加へて農工業界の金融に寄與することは實に多大である。此の他臺灣銀行同盟以來本島には各種銀行勃興し、或は別に本店銀行を開設し、又は支店銀行を設け、大正八、九年の好況時には一時盛興を極めたが、其後の整理の必要上右倒産は減資を行ふ等種々の變遷を經て今日に至つた。現在の銀行は、臺灣商工銀行、華南銀行、彰化銀行、三十四銀行臺灣支店の普通銀行と、臺灣信託銀行及日本勸業銀行支店等である。是等各銀行の大正十四年末に於ける資本金は六千五百八十萬圓であつて、內訳金殘高は一億七百六十萬圓、貸出金殘高は二億六千九百四十一萬圓（內訳支拂六千三百九十四萬圓）を合むである。

此の外更に近來になつて設められた處の信用組合、無盡業等があり、特別會計組織として銀行業を相營つて本島の金融を助けて居る。

物價　本島に於ける物價は、總して內地の相場、金融等の如何に因つて、支配されるのが常であるけれども、本島産米、野菜、魚類等の食料品を始め、其の他本島産の物價は內地の其等に比して遙に低廉である。但し、呉服類、陶器、雜品、化粧品、其の他一般に雜貨品等、內地産及外國製の各品が、內地に較して、約一割五分內外高價であることは免れむ能はざる所である。併し乍ら、之を概觀すれば、本島に於ける物價、分けても生活必需品の如きは、內地に較べて著しく廉であつて、若し內地人が此の地に來住して本島人式の生活を營むならば、其の生活費は恐らく半額でも足るであらう。

勞働　の如きも大工、左官、石工、木挽、瓦屋、煉瓦積、塗師、鍛冶、鋸物、農作、仲仕、荷車、日雇、漁夫、其他各の各職業を通じて、內地人は內地に於ける前者と略ぼ大差ない。尤、本島人は內地人に比較して、概ね四割乃至四割五分安で、殊に人力車夫の如きに至つては、內地の其れと始と比較にならぬ程に安く、此等の勞賃は、一般に本島に於ける勞力の供給が、對岸支那からの勞働者の渡來によつて超るのである。



田　蘆

〔**農業**〕臺灣總督府の農業は、特別會計にたつて居り、明治三十年度から開始されたのである。當初は島に於ける收入と一般會計からの補給とに依つて維持して來たのであるが、早くも明治三十八年度からは、その補給を廢止して臺灣總督の負擔とすることになつた。實に其れ計りではなく、幾ばく年と共に益々增加に進んで來た爲に、或は國稅の一部を割き、或は內地に於ける等の財源を以て補充の全部を賄ひて最後に至り、國費の負擔に對して、却つて多大の貢獻を爲し得るまでになつた。

本島特別會計の開始されてから、今日に至るまでの農況の狀況を顧るに、開始初年の明治三十年に於ては、歲入歲出各一百萬圓であつたが、其れ十年後の明治四十年度には約二倍六分の增加となり、更に十年後の大正六年度にはつは盛四倍六分に迄、大正十年度に至つては實に八倍二分の歲增で、五百萬圓といふレコードを示したのである。

所で大正九年以來、本島も一般財界不況の影響を受け、歲入は著年歲少を告げて來たので、大正十一年度以降には特別會計の整理を爲し、殊に大正十四年度豫算の如きは、政府の財政緊縮方針にも順應して、努め、極力整理節約を行つた結果、大千九百萬圓餘に減じた。斯くて國費の負擔は大正十年度に比較して、約三割二分以上の減額を見ることになつたのである。

今大正十四年度に於ける歲入の主なるものを擧げると、租稅、官業及び官有財産收入、官有物拂下、前年度剩餘金繰入金で、公債の繰越收入は中央政府の方針もあり全然見合せたのである。又歲出の主なるものは、總督府費、警察費、教育費、交通費、事業費、勸業費、補助費等である。

專賣

臺灣總督府の專賣事業は、明治三十年に阿片の專賣を始めて以來、同三十三年には食鹽と樟腦、同三十八年には煙草、更に大正十一年には酒を加へて現在都合五種類である。以下少しく之の概況を說明しよう。

〔**阿片**〕阿片の回吸を如何と題する事は、本島領臺當時の一問題であつたが、政府は一時に之を禁絕に繫ける事は、實際の行ふ能はざるを顧み、明治三十年に臺灣阿片令を發布して、一般の阿片吸食者に對し、特に阿片癮に陷つて居る者に限り癮札を下付して廢用とし、以て今日に及んで居るのである。

所が其後に至り其の用途は漸次、當局の設つた癮札の效果は次第に現はれて、吸食者は年々減少し、其の事實上大に減少するに至つた。其の事實は左表に示す通りである。

	阿片取締費千圓	阿片取締吸食特許者數
明治三十三年	五五五五〇〇	一五六五人
大正十三年	一一五三五〇〇	三六三五人

〔**食鹽**〕食鹽の專賣は臺灣當時に於ても行はれて居たものであるが、食鹽は本來に從來、加うに鹽價の騰貴も

甚しくなり住民の苦痛大なるものがあつたので、明治三十二年五月專賣制度を實施し、鹽田の復興を計り、又新に鹽田を擴張して產額の增加と品質の改善を圖り、且住民に生業を與へる等社會政策の目的にも出たものである。

專賣施行の趣旨は右に述べたる如く、產業奬勵と社會政策を行ふ目的で、且生活の必需品であるから收益に重きを置かず、單に收支の均衡を保つに止めたのである。

斯くて、其の產額、鹽田面積は共に漸次增加して、大正十三年末現在では鹽田面積二千三百五十甲、其の產額三億三千餘萬斤に達し、何れも專賣實施當時の約十倍を示して居る。そして今日では島內供給の餘力を以て、尙之を內地、朝鮮、樺太、露領沿海州、香港等に移輸出し得るまでになつた。

〔樟腦〕本島の樟腦は世界の總產額の大半を占め、本島に於ける重要產業の一つであるが、總督府では、更にその品質を改良し、或は產額を維持する等の目的で之を官營としたものであるが、今や品質の一定せること、生產の多量なること、價格の低廉なることゝは、我が樟腦の三大特色であつて、遍ねく世界の市場に其の聲價が認められてゐる。

其の用途の大部分はセルロイドの原料で、他は醫藥、香料、蟲除け、印度に於ける燒香用等に供せられ、副產物の白油、赤油、芳油及藍色油の四種は夫々工業用、香料、原料、防臭、驅蟲、殺菌、防腐塗料、鑛石の選鑛等に用ゐられる。

其の產額は世界の需要に應じて生產調節を計つて居るので、年々多少の相違があるけれども六百萬斤內外が普通である。大正十三年度の樟腦收入は一千百八萬七千餘圓である。因に殖產局では、各地に樟樹造林を營んで、樟樹の維持增殖を企てゝ居り、民間で之に倣つて居るものもあつて、此等の中には相當な成績を示して居るものがある。

〔煙草〕煙草は主として總督府の一財源たらしめる旨意から官營としたもので、爾來、住民の富力の增進と民度の向上とに伴つて、其の消費量は年々增加し、專賣の成績は頗る良好で年收一千百萬圓に達する樣になつた。

現在の製品には、刻煙草八種、葉卷七種、紙卷兩切四種、紙卷口附一種、都合二十種類がある。

〔酒〕島內に於ける酒類は、麥酒を除くの他は其の製造も販賣も共に總督府で之を目營し、酒精も亦島外へ搬出の爲には民間の製造を認めて居るが、島內に於ける販賣は總督府の專賣として居る。

製腦原料樟木木片創取

中央研究所

酒專賣の目的とする處は、之に依つて得る收入を以て、財政上の調節を圖ると共に、酒の管理に依つて其の品質を統一し、以て島民の保健を計らうと云ふに在る。島內に於ける一箇年間の消費量は約十五六萬石で、蒸餾酒が多く、釀造酒も亦少量消費される。大正十三年度の賣渡石數は十三萬九千四百餘石、價額一千百五十二萬餘圓である。

以上述べ來たつた通り、本島の五專賣は、各其の目的を異にして居るが、孰れも順調の發達を遂げつゝあつて、大正十三年度の專賣總收入額は實に四千百餘萬圓を算し、我が總督府財政上の主要なる地位を占めて居るのである。

社會事業

天災地變等の非常罹災者を救助する爲には、各州廳に罹災救助基金の積立があり、窮民救助の機關としては、各主要地に慈惠院の設けがあり、兩々相俟つて此の種の目的を達成する上に遺憾のないことを期して居る。

不良兒の感化事業は、久しく民間の經營に委ねて來たのであつたが、大正十一年に其の事業を引受けて總督府の直營とした。臺北州下內湖庄に在る成德學院が其れで、收容兒童は六十名、大正十四年五月現在の在院生が四十八名である。

其の他社會改良事業とも稱す可きものには、公設市場、公設質舖、職業紹介所、公設家屋、公共浴場、簡易食堂、無料宿泊所等始と總ゆる施設が備はつて居る。中にも公設質舖は、本島特有の一施設であつて民間質舖よりも頗る低率な金利を以てする庶民金融の機關であるが、現在臺北市、基隆市、臺中市、嘉義街に於て營まれ、其の成績何れも甚だ良好である。

研究調査機關等

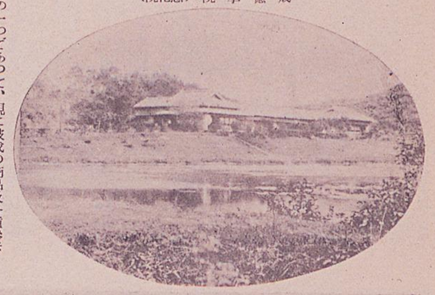
〔中央研究所〕本島の產業並に衞生上の基礎的研究調査を爲す機關であつて、其の事業とする所は農業、獸醫、林業、工業、其の他產業及び衞生に關する研究、調査、試驗、分析、鑑定、講習、講話、種苗、種畜、細菌學的豫防、治療品、其の他の研究調査、又は試驗の結果に因る物料等の育成製造、配付及び住付等頗る廣汎に亙つてゐる。當所は明治四十二年開設された研究所及びそれと相前後して設立された農事、醫業、茶樹栽培、園藝、種畜及び林業等の各試驗場を統一して、大正十年に新設されたもので、四部一課と、地方十一箇所に在る支所とに於て前記事務を分

掌してゐる。

〔總督府博物館〕本島有史以前の考古的資料、蕃族誌に南洋各種族の土俗標本等が種別してあるのは本館の特色で、今から十七年前に開設されたものである。

〔總督府圖書館〕十一年前の開設で、對岸支那の珍書が多いことは其の特色であつて、大正十二年度末現在の藏書數は、和、漢、洋書を合せ約八萬六千册である。

〔總督府商品陳列館〕今から八年前に開設され、南支南洋との貿易の發達を圖るのが主要目的の一つであつて、現に彼我の商品及各種參考品を陳列して公衆の閲覧に供して居るが、其の他一般商工業の改良發達に關する適切な報告や施設をも爲してゐる。



（院化感）院學德成

新聞、雜誌

〔新聞〕本島で發行されて居る主なる新聞には、臺北に臺灣日日新報、臺中に臺灣新聞、臺南に臺南新報、花蓮港に東臺灣新報があり、何れも日刊であつて、前の二者は夕刊をも併せ發行してゐる。

以上各新聞とも內地人の發行に係り、大體內地人本位の新聞であるが、概ね其の一頁乃至二頁を割いて漢文の飜譯記事を掲げ、以て本島人讀者の爲に備へて居る。

〔雜誌〕民間で發行の週刊又は月刊雜誌に、臺灣經世新報、實業の臺灣、新高新報、臺灣民報等があり、後の二者は本島人の經營で取次を許可されて居るものである。官廳雜誌としては臺法月報、臺灣時報、臺灣警察協會雜誌、臺灣教育、臺灣鐵道、臺灣週信協會雜誌、專賣通信、其の他がある。

博物館

附錄

都市、名所、舊蹟

島內五州二廳の主要な都市と、其の都市內又は附近に在る名所舊蹟を擧げると次の通りである。

人口は大正十二年末現在であつて、其の中に外國人とあるのは大部分支那人である。

○臺北州

臺北市　人口　一八七、九六一（內地人）　五二、二七七（本島人）　一三、八二一（外國人）　一三、三二八

臺灣總督府の所在地であつて、又臺北州廳の所在地である。其の面積は二万里七分、大正十一年四月に市內の行政區域を改正する迄は、大別して城內、大稻埕、艋舺（本島語で船を意味してゐる）となし、其の城內と云ふのは重に內地人の居住區域であつて、新領土の政都としての諸機關は概ね此の區域內に設けられ、文學校、病院、博物館、圖書館其の他各種の文明的機關が設備されてゐる。

元の大稻埕と艋舺とは主として本島人の居住する所で、前者は商業殷盛、本島の重要輸出品である茶の取引は此の區域に限られてゐる。後者は其の名の如く、昔は大小の船舶が輻輳して、極めて繁盛な河港であつたと傳へられるが、今は衰退して場末の陋巷たるに過ぎぬ。

官幣大社臺灣神社（臺北市大宮町）明治三十八年本島御出征中に風土の御病を得させ給ひ、島內に於て遽去あらせられた故北白川宮能久親王並に大國魂命其の他二神を祀つた神社である。

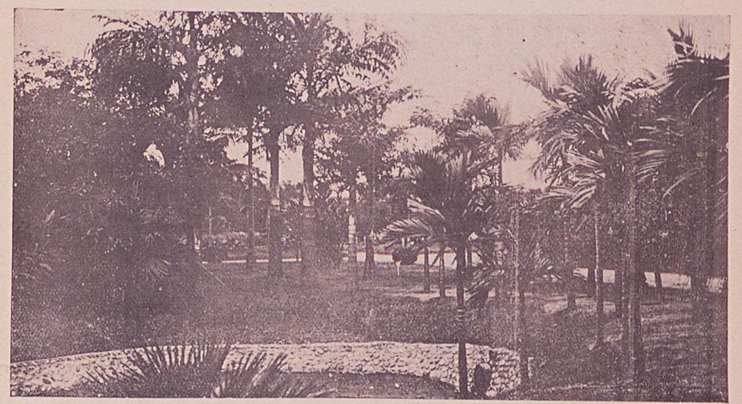
明石元總督墓域（三橋町共同墓地）大正八年中、鄉里に於て歿ぜられたのを、此の墓域に遺骸を埋葬したものである。

乃木將軍母堂墓域（同上）第三代の總督で世界に偉名を馳せた故乃木大將の母堂が此の地に永眠されて居る。

圓山公園（市の中央から約二千五町）昔、太古風と云つて、北臺の名家陳維英が別莊を築んだ所である。領臺の後、圓山公園と稱し遊覽の地とされた。附近には古代貝塚の迹、動物園、臨濟護國禪寺、忠魂堂、陸軍墓地、運動場等がある。

總督府植物園（市內）中央研究所の林業部が在る所で、多數の帶熱植物を植ゑ、林業上の試驗に資すると共に、池を穿ち、小山を築いて熱帶

三線道路（臺北市）



植物園

地氣分に富あた遊園地である。其の異つた風致は内地では見ることが出來ないもので、地積も亦廣い。

芝山巖（士林驛から東北約十五町）明治二十九年一月元旦、總督府の學務官僚樺取道明以下六名が國語傳習の爲此の地に在り、匪徒の蜂起に遭つて其の凶刃に斃れた。仍て時の總理大臣伊藤侯の選文に成る碑を此の地に設けて、彌來本島で死亡した教育家をも合祀し、毎年二月一日を以て莊嚴な祭祀が行はれる。

北投溫泉（淡水線新北投驛下車）臺北から汽車で僅に三十分、又坦々たる道路には自動車を通じ、槑山を繞らし、靈界が沸々と湧いてゐる。其の設備の完全なのと相俟つて、今日の遊覽地としては島内第一と云はれる。

草山溫泉（士林驛から二里半、北投驛から二里）七星山の山腹に在つて海拔一千二百餘尺。先年皇太子殿下の行啓を仰いだ所であるが一般の設備に至つてはまだ北投に及ばない。併し乍ら、其の野趣に富んで居る點では却つて大に愛す可きものがあり、氣温は臺北に比して常に約十度低く、避暑地としても申分がない。臺北からは自動車の便がある。尚北投から此の地に亙る一帶は、恰も箱根の地勢の樣であつて、此の地を中心に一大遊園地を造らうとの計畫がある。

烏來溫泉（臺北市を距る七里）蕃界に在つて、赤渓山碧水の稱す可きものがある。蕃情を視察する上に於ては臺北から最も近い。交通機關としては半ば汽車、半ば輓の便がある。

三峰戰跡（山子脚驛から三十二町）領臺當時、猛烈に土匪の反抗を受けて、我が將卒二十九名の戰歿した古戰場である。

基・隆・市・　人口　五六、三五八（内地人一四、二〇五　外國人三九、二五五　本島人二二、八九）

内地への出入口であり、縱貫鐵道の起點であつて、臺北まで十八哩、現に島内の最大要港であるが、豫算總額二千五百萬圓を投ずる大築港が近く竣成する筈で、其の繁榮は更に一段を加へるであらう。附近に海水浴場もある。

北白川宮征討紀念碑（澳底驛から約一里餘）明治二十八年六月一日、故北白川宮殿下には、基隆郡の東端三貂角の澳から御上陸あらせられ、其の夜天幕を張つて佗びしい一夜を淺かせ給ふたのが此の記念碑の在る所である。

クールベー演（驛から東方海上十四町陸上三十町）明治十七年清佛の役に佛軍クールベー中將が、基隆占領の際の上陸地點で、其の佛文の石碑は當時の戰歿將卒の永眠せる所である。

社寮島（基隆の港口）西班牙人が其の占據時代に城廓を構へた所謂サンチアゴ城跡であつて、島中に番子洞と云ふ洞穴があり、西班牙時代の題石文字を讀むことが出來る。

淡・水・街・　人口　三一、三五三（内地人四〇、〇〇六　外國人　本島人二二、三四七）

臺北から北方十三哩、汽車で五十分。領臺以前は南の安平と共に本島の最大要港であつたが、今は河口が全く淺くなつて衰へて終つた。英國の領事館は今尚此の地に置かれて居る。江を隔てゝ觀音山の姿も好く、海水浴客も少くない。ゴルフ・リンクには毎日曜日を數の輻湊したゴルファーを見受ける。

紅毛城（驛から西方十八町）今日の英國領事館であるが、一六二六年西班牙人が古據時代に築營したもので、古色蒼然、昔を偲ぶことが出來る。

清國時代の舊砲臺（紅毛城の西方數町）明治九年即ち清曆光緒二年に巡撫劉銘傳が築營したもの、今は僅に外郭を留めて居るだけで、寂寞人に逼つて眞に廢墟の思ひがある。附近にゴルフ・リンクの設けがある。

宜・蘭・街・　人口　三一、三五八（内地人一八、八八八　外國人　本島人一九、三八〇）

東海岸に於ける最大の都會で、濁水溪流域の沃田と、千古斧鉞を入れない所の大森林とに依つて名高い。基隆の次ぎの八堵驛から鐵路宜蘭線に依るのである。

礁溪溫泉（宜蘭から北方約二里半）公共浴場は丘巒上に在り、前面に萬頃の田園を隔てゝ太洋を望み、風景が甚だ佳い。

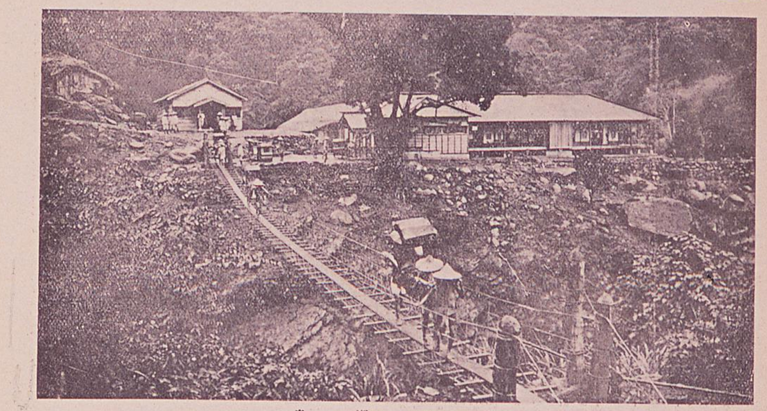
蘇澳（宜蘭鐵道の終點で、郡役所の所在地、同時に宜蘭平野唯一の港灣で、漁港の設備があり、風景も頗る好く、天然炭酸水を湧出する。

○新竹州

新・竹・街・　人口　五九、三四七（内地人三八、八〇五　外國人　本島人四〇、五四二）

昔此の地は竹塹社と云つたが、其れはガオガン高山群の中のタツコウサン社と同一語原から出たもので、邦人が最初本島を高砂國と呼んだのも、數百年前此の地方に居住した蕃人の名稱から來たものだとの說がある。今から二百十年前に百餘人の對岸福建人が來て拓いた所の北部臺灣唯一のコロニーであり、林氏の潛園・鄭氏の北郭園等の跡がある。現に

北投公共浴場



島來溫泉

市街は相當に殷盛である。新竹州廳の所在地で、市制の施かれる候補地である。附近には北白川宮の御遺跡地があり、臺灣神社が分祀されてゐる。

桃園街 人口 一八〇〇六（内地人 一〇一一四 外国人 六八）

同じく北部臺灣で而かも近く相隣りして居り乍ら、新竹が福建人のコロニーであるに對し、桃園が廣東人のコロニーであると云ふことは面白い。茶の中心地で全島産額の七割を占めて居る。

角板山（桃園驛から九里十七町）島外から來て遊ぶ人士の大多數が、海拔一千四百餘尺の此の角板山上に客となる譯は、此の地が殆も全蕃山の縮圖であつて、而かも羊腸たる山路乍ら、輕便軌道もあり、交通が比較的便利なからである。途中、山は次第に高く、水は愈々清く、蕃人が其の間を去來して高山蕃界らしい氣分に滿ち、檜樹造林や茶園等々見るにも好い。大正十四年には秩父宮殿下の御臨行があつて廣くその名を知られてゐる。貴賓館、蘭風閣等があり、遠來の珍客を迎ふる設備は相當に整つてゐる。

○臺中州

臺中市 人口 三八〇〇四（内地人 二七、四五六 外国人 七二）

南北新興の二大都市である臺北と臺南との丁度中間、即ち臺北から南方百哩、臺南から北方九十九哩に當つてゐる、市街は内地式で新進潑剌の氣分に充ち、雄大で雅趣に富んだ全島一と云はれる公園がある、臺灣米の本場であり、又糖業の中心をなしてゐる。又バナナの取引が盛んでその大市場がある。

彰化街 人口 一八、九五六（内地人 一七、四二六 外国人 三五六）

幾んど純本島人の都市として島内稀に見る繁盛な所で、芭蕉實は此の附近が本場である。本島舊都の一つである丈けに、新舊文化の上から觀るも重要な地である。

八卦山（彰化街の東南七町）附近一帶の平野の中に孤立した一丘陵であつて、古來要害の地として史實に富んでゐる。我が南征の際にも、相當に激戰のあつたと云ふ次第は、丘上の記念碑が詳らかに之を物語つてゐる、今は彰化公園の一部として、頗る眺望が良い。

鹿港街 人口 三一、九六六（内地人 二四五 外国人 三一、五三七 一八九）

彰化の西方約三里の所に在つて、輕便鐵道の便がある。昔は安平、艋舺と共に、本島の三大要港の一と稱せられたが、今は海淺く、砂遠く、到底當年の繁盛を見ることが出來ぬ。けれども、在りし日の俤は、此の一小舊都にも偲ばれて、純然たる往時の本島都市の典型を窺ふことが出來る。附近の鹿田も亦遠來の客に取つては見ものである。

南投街 人口 三一五四〇（内地人 九七五 外国人 二〇、八〇四 六一）

臺中の南方七里二十九町の所に在つて、矢張り輕鐵の便がある。中央の山地に向ふ入口であり、臺中から日月潭への通路にも當つて居つて、此の地方の中心市街を爲してゐる。

日月潭（南投から約十里の山中湖）臺灣の名所として最も喧傳されて居る所で、海拔二千四百尺、四山影々落して、殊に朝夕の風致は絶佳である。臺灣電力會社が此處に一大電力工事を起したが今や不幸一時中止の姿に在ることは既述の通りである。

埔里街 人口 三三、五六四（内地人 一二、〇八〇 外国人 三三〇）

臺中から南投を經て、更に其れから幾んど直角に中央の山地に入ること十五里二十二町にして、四顧廣濶、地味の肥えた一大盆地が展開されてゐる。埔里街は其の中央に在る盆地都邑で、此の山奥には珍しい繁盛な地である。地は海拔二千尺、小洛陽の名さへある程で、山水共に秀麗である。東西横斷道路の完成を目前に控へて、其の前途は益々有望と云つてよかろう。

霧社の斷崖（埔里から六里十八町の番界）島來に於て蕃界の氣分に觸れ、角板山に於て更に濃厚な氣分を味つた人も、一度び海拔四千尺の霧社に到るならば、其の雄大な高山蕃地の景趣には、言ふ可からざる壯美を感ずるであらう。附近には櫻が多くて、十二月に滿開と云ふのも珍しい。埔里からの途に在る斷崖、人止の關に至つては、觀る人の心臓を寒からしめるものがある。唯だ此の地いまだ交通の便に乏しく、訪ふ人の甚だ稀れなのは遺憾である。

○臺南州

臺南市 人口 八三四〇（内地人 一二、三八八 外国人 九七、五三五 二、五五五）

全島内の最も舊い都で、領臺以前は首府であつたこともある。總面積二万里七分、千度臺北と同じである。臺北が政治の中心であるに對して、

日月潭

北白川宮殿下御遺跡

臺南は商業の中心と云ふことが出來る。臺南州廳の所在地であつて、島内第二の大都市である。

官幣中社臺南神社　臺南市南門町に在り、明治三十八年征臺の砲軍中に御病を得させ給ひ、十月二十八日此の地に薨去あらせられた北白川宮能久親王殿下を奉祀せる神社で、大正十四年十月三十一日官幣中社に列せられた。境内には征臺當時御使用になつた建物があり、御遺跡所として保存せられ、中には當時の御遺物が藏されて居る。

開山神社（市内）　支那明朝の將に倒れんとするに當り、海を渡つて此の地に到り、孤忠を唱へて其の回復を圖らうとした所の明朝の遺臣鄭成功が祀つてある。其の生母が肥前平戸の田川氏であることは前にも述べたが、國姓爺の名を以て知られてゐる。

五妃の墓（市内補盤淺）　明朝の遺孤である東靖王が、清將の施琅から征軍を受けて、遂に死を決した時に、其の五妃は之を知つて王に先だち、打擣つて自殺した。之を葬つたのが此の地である。

孔子廟（市内）　鄭成功の子鄭經が之を建てたものであつて、毎年春秋二回、八佾の舞を以て釋奠を行ふ。

關帝廟（市内）　鄭成功が蜀の關羽の武勇を追慕して、建設したもので孔子廟を一名文廟と稱するに對して、之を武廟とも云ふ。

赤崁樓（市内）　今から二百六十餘年前、和蘭人が創設したもので、又呼んで、プロヴイデンシヤと云ふ。蘭人が占據して政廳とした所である。

赤崁城跡（臺南市安平、臺南驛から一里十八町）　寛永年間、邦人祝原太郎石衛門、濱田彌兵衛一族が、時の和蘭駐在官吏と衝突したことを以て名高い所である。原名をゼーランジヤと稱し、一六二四年に蘭人が築營したもので、今は僅に殘礎を見る丈けであるが、亦以て當年を偲ぶ資料と爲すに足りる。

嘉義街　人口　四三五五〇（内地人 六一七四　本島人 三五二七　外國人 八〇二）

臺北から南百六十二哩、臺南から北三十八哩。阿里山への登口として、阿里山砿の集散地として、市街は頗る殷賑、後年市制の布かる可き候補地である。

阿里山と其の神木（嘉義街の東十二里）　阿里山系と云ふのは、其の低いもので七千五百尺、高いのになると九千六百餘尺。全山紅檜、扁柏等の巨樹を以て蔽はれ、本島の一大寶庫である。登山鐵道を敷き、旅轉また旅轉、七十有餘の隧道を鑽つて山巔に至る壯快は到底筆紙に盡せぬものがある。近く新高山をはじめ、中央大山脈を望み眺望絶佳である。盛夏の候も其の氣温は七十一度を越えない。

山巔に近く、蹤跡として天を屋すると程の一大紅檜がある。樹齢三千歳、周圍六十五尺、直徑二十尺、全長百三十五尺、木邦無比の巨樹であつて、之を阿里山の神木と稱してゐる。

關子嶺温泉（後壁驛から四里半）　地の幽邃なると設備の整つてゐることは、北部臺灣の北投温泉と伯仲し、南部臺灣第一の温泉場であつて、自動車及び輕便軌道の便がある。

阿里山神木

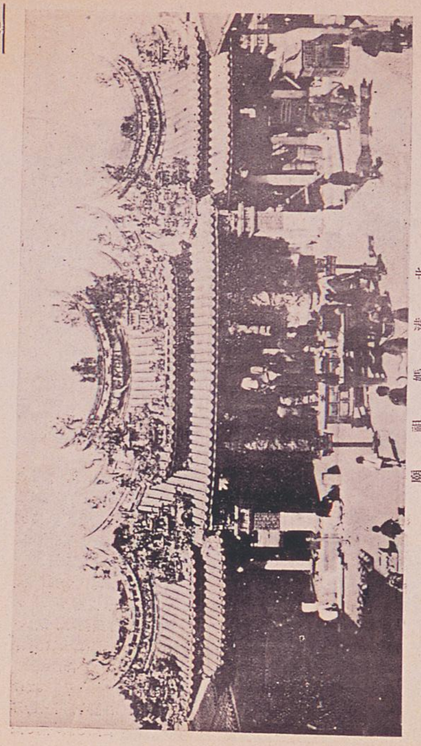
北回歸線標塔（嘉義驛の南方一里二十一町）　嘉義驛と水上驛との中間西方に在り、列車中から之を見ることが出來る。云ふまでもなく温帯と熱帯との分界であつて、日本に唯だ一つの標塔である。

北回歸線標塔

吳鳳廟（嘉義驛から車南約三里）　身を殺して仁を成せる義人吳鳳を祀つたものである。吳鳳は今から約百五十年前、時の蕃通事として、蕃人を悅服せしめたが、唯だ首狩の一事が如何にしても止まないのを慨いて自ら變裝して故に蕃人の兇刃に斃れ、終に彼等をして悔悟せしめ、爾來、阿里山蕃人の間に、其の惡習を全く絶たしめた人である。佐久間元總督も是に參拜し、「殺身成仁」の額額を供へたので、以來成仁廟とも云ふ。

北港媽祖廟（斗南、大林、嘉義の三驛から輕鐵がある）　本島人に對する北港の媽祖廟は、恰も内地に於ける信濃の善光寺が、讃岐の琴平神社の樣である。參詣人年々四十萬乃至七十萬。約二百年前、一支那僧侶が、支那福建省湄州、朝天閣の天上聖母を奉じ來つて祀つたものである。水の神ともなり、船の神ともなり、又軍神ともなつてゐる。支那式の廟宇の構造は人目を眩惑せしめるものがある。

新高山（嘉義街から二十九里十四町）　玉山又はモリソン山と云つて居つたもので、新高山と云ふのは明治天皇の賜名である。海拔一萬三千三十五尺、富士山を凌ぐこと實に六百三十五尺（三九五〇米〇〇）日本第一の高山である。



高雄港北岡嶋

高・雄・市・ 人口 [illegible] 外本内 [illegible] 風土地 [illegible] 人人人

繰廻綫道の終點で、塞北を距ること二百二十九哩。港灣を囲繞して南北の二大突港を為してゐる。遠く六十餘年前から既に開港場であつたが、今日の様な開發は最近手つとり、更に築港の發展を俟つて、其の前途は洋々たるものがある。高雄州廳の所在地である。

屏・東・街・ 人口 [illegible] 外本内 [illegible] 風土地 [illegible] 人人人

南部台湾の地であつて、下淡水溪から東に長びける唯一の都會である。高雄の東方廣野上に。線上に見る下淡水溪の鐵橋は延長五千七尺、東洋一の長橋である。

琉球藩屏臣王十四名墓（恒春郡車城庄統埔、高雄から二十四里）明治四年十月牡丹社蕃民六十九名が東海岸に難破した際、牡丹社蕃人に惨殺された王十四名の墓を記つたもので、蕃地は明治七年の征蕃に際して西鄕都督が之を建てた。

石門（海岸線から約二里）前記の同盟から牡丹社蕃人の征伐となり、最も激戰を傳めた所で、其の名の如く一千三、四百尺の巨岩が峡谷の天然要塞である。

四重溪温泉（車城から石門に到る途中）岡強な仙境である。まだ殆んど開の発ないことは遺憾である。

鵝鑾鼻燈台（恒春から約三十里）日本の領土の南極に輝く此の燈塞は、清國が米國政府の勧めに依つて、明治十五年四月着工し、翌年に建設したもので、内國の資物は其の雄大である。本年政府は此の地に一大無線電信所を建設した。

馬・公・街・ 人口 [illegible] 外本内 [illegible] 風土地 [illegible] 人人人

高雄州下にあつて居る澎湖島の首都で、歴史は一六〇二年、後には一六二二年の二回に渡つて蘭人が占領したことあり、遠くから習ちと燈蕃蕃港として水平線上の光彩の絵である。

クールベー中枯蕃墓（馬公城北門外）土蕃と共に中枯が悪疫に斃れた地に設けられたものである。

千人塚（馬公街交差）日清の役に此の地に戦、病死した者を葬した所で、其の数実に一千一人、仍つて此の名がある。

○基隆港、花蓮港灣

基・隆・街・ 人口 [illegible] 外本内 [illegible] 風土地 [illegible] 人人人

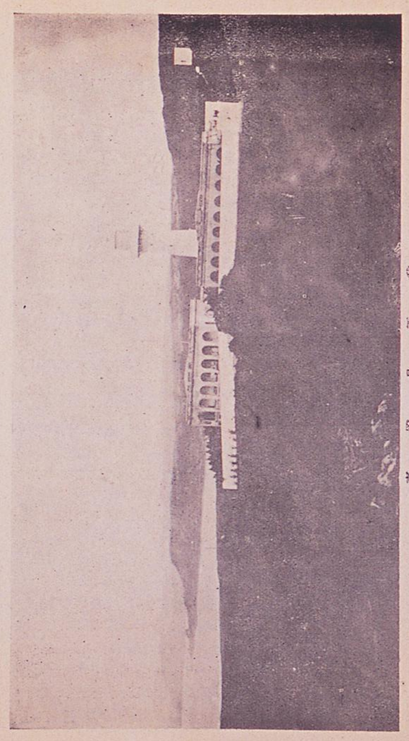
鐵道幹線の起點であり、港灣は波浪高く碇泊に不便であるが、地方物産の集散地として沿岸航路の第一港地となつてゐる。蕃灣の所在地である。

花・蓮・港・街・ 人口 [illegible] 外本内 [illegible] 風土地 [illegible] 人人人

人口の稀薄な東海岸に於て、蕃東街と共に唯一つの都邑を成してゐる。既に此の國都間は鐵道に依つて連絡せられ、又中央山脈を横斷する所部との連絡道路も開かれたから、今後の發展は期待される譯である。花蓮港灣は此の地に設けられてゐる。

蕃薯藷（ハイ・ヤム）

蕃薯藷、新城から蘇澳に至る海岸で、別つた様な三千尺の絶壁が海から直に聳立して、而かも延長十數里に亙り、世界第一の大斷崖だと云はれる。



蘇澳桑港

〔内地から臺灣まで〕 内地から臺灣への往復には、臺灣總督府の命令線、神戸、門司、基隆航路があつて、一定噸數の大型郵船が毎週四回出る。この基隆通の船に乘つて正午神戸の港壁を帆すると、美しい瀬戸内海の景色を眺めて、翌朝人絲船門司に著く。こゝで半日遊べて、其の日の午後四時頃門司を出帆、一路基隆へ直航する。支海峡に落日を眺め内地の山に別れて一夜を明かせば、船は島影もない大洋の眞ん中を進んで居る。門司を出て三日目の朝、船は臺灣岸壁に横著された綿の山々に圍まれた港内には大小の汽船が碇泊し、或は浮船の群が林立して居る。其の間を舢舨が通つて桟橋の客には黄國旗を感じさせる。

門司から基隆までの航路は七百五十浬、三日かゝるが、大正十五年度の豫算が確定すれば約一日短縮され、門司を出で一日目には基隆に著くことが出來るやうになる。

〔臺灣の遊覧〕 基隆埠頭の桟橋に上れば、直に縱貫鐵道の起點である**基隆驛**がある。こゝから汽車で一時間、臺灣の首都臺北に著く。

臺北市は總督府の所在地で人口十萬に近い大都市である。市の面積は東京の半數を以て人口は東京の三倍半を以て迎られ、幅十間のアスファルトの街道は市街を縦横に貫き、市の中央に二百三十坪の大公園があり、三線道路の連絡から感じは、東洋の台北市とまで言はれての程である。本島人街の中心大稻埕に其の繁榮を見、本島人の商賈が住居する遊廓の人々には眼が多い。臺灣神社は市の北方淡水川の岸に臨み、緑綿の山を背に丘上にあつて、神殿等の文能殿堂もすぐれたるる。

臺北駅から淡水線の鐵路によつて四十分、**北投温泉**に遊べば正に二十分で淡水港に行くことが出來る。

基隆遊覧は臺北から臺灣南部の要地を南に進べて約一百三十哩の高雄に達する。行くゆく車窓から田野の風景を眺める或は本島人村落の珍しきを見たから明十十時、先づ**桃園市**を過ぐ。角板山に登つて蕃族の事情を見るには此處に下車し、臺北に乘つて行くのである。

新竹、石油坑で知られた**苗栗市**等を過ぎて、臺北から百哩の所に**彰化市**がある。其の安大な公園や盛んな市況等は臺灣の一番に優れたるものである。其の近くに若し近く人力車山の絶景を望むことが出來る。やがて二水驛を過ぎる、**目的**地に遊ぶ人は此處から汽車を乘り換へて更行するか、又は臺北から南投を過ぐる鐵路による。

更に南に進めば**嘉義**街に到る。大規模の製糖所有名である。**阿里山**に登るには此處から登山鐵道によつて行く。又、北港媽祖廟に參詣するには嘉義から軽便鐵道によるのが便利である。嘉義から南に向ふ途中**北回鐵線**を通ずる、此の邊から一帯の風物は著しく熱帯的氣分を濃厚にして來る。

臺北から約二百哩で**臺南市**に著く。市中には廟人占領時代以來の名所舊蹟が多く、又緑蔭の臺灣氣分を帶ぶしてゐるのは臺南市である。臺灣に遊ぶ人は非常に臺南まで見物する必要があらう。

臺南から二時間足らずで縱貫線の終點たる**高雄市**に達する。名勝としては鼓山、獅子山がある。其の中に先年皇太子殿下が行啓遊ばされて、御命名になつた壽山から港内の全景を眺下し能る程は樂に第一の眺望である。出更に。但此處から東能工場を以て明ゆる**屏東**に行くには潮州線があり、有名な玉泉水源の大鐵橋がある。

東部海岸は東海岸の断崖が數十里に亙つて、怒濤打寄せる波間から直立し、遊覧の地として少なくない。此の断崖線樂すべき面白い。此の邊の海道一帯の雄大壮観は臺灣全島を他に見られぬものである。基隆の夜景、八斗子から**宜蘭線**によつて二時間半で終點**蘇澳**まで行き、其の線路を貫ずるに足るものである。鉛中、郷溪温泉や宜蘭街、蘭貢等がある。

〔遊覧日数其の他〕 臺灣の主要な遊覧地を遊覧するには、一週間乃至十日間で足らる。然し能るその他の遊覧地を十分に楽つて倘來を旅行をすることが出來る。諸旅費も内地に比して安價であり、樂に人力車は低廉であり、また利る處に内地人も多いから言葉の通じないことは云はれない。それで夏の休暇を利用して、海上旅行の楽味を味ひつゝ臺灣へ、南國の黄ばつた風物に接するこゝは爽も有望又愉快な行樂である。多期は遊樂の旅を兼ねて遊覧するのも好し。

説明
ターゲット

この原本は
一部文書が
糊付けされいます

〔內地から臺灣まで〕 內地から臺灣への往復には、臺灣總督府の命令線、神戸、門司、基隆航路があつて、一萬噸級の大型優良船が毎週四回出る。この基隆通の船に乘つて正午**神戸**の埠壁を出帆すると、美しい瀨戸內海の景色を眺めて、翌朝八時船は**門司**に著く、ここで半日遊んで、其の日の午後四時再び出帆、二路基隆へ直航する。玄海灘に落日を眺め內地の山に別れて一夜を明かせば、船は島影もない大洋の眞中を進んで居る。門司を出て三日目の未明、船は**基隆**埠壁に橫著され、綠の山々に圍まれた港內には大小の汽船が碇泊し、或は戎克船の帆往か林立して居る、其の間を舢板が通うて新來の客には異國情緒を感じさせる。

門司から基隆までの航路は七百五十二浬、三日かゝるが、大正十五年度の豫算が確定すれば約一日短縮され、門司を出て二日目には基隆に著くことが出來るやうになる。

〔臺灣の遊覽〕 基隆埠頭の埠壁に上がれば、直に縱貫鐵道の起點である**基隆驛**がある。こゝから汽車で二時間、臺灣の首都臺北に著く。**臺北市**は總督府の所在地で人口二十萬に近い大都市である。市街は煉瓦や鐵筋コンクリート造りの三層樓を以て連ねられ、幅十間のアスファルトの坦道は市街を縱橫に貫き、市の中央に二萬三千坪の大公園があり、三線道路の瀟洒たる感じは、東洋の小巴里とまで言はれる程である。本島人街の中心大稻埕に其の繁盛を見、本島人の風習を知るも遊覽の人々には興味が多い。臺灣神社は市の北方淡水川の支流に臨み、槑綠の山を負ふ丘上にあつて、神域淸く又眺望もすぐれてゐる。

臺北驛から淡水線の鐵路によつて四十分、**北投溫泉**に遊んで更に二十分で淡水港に行くことが出來る。

縱貫鐵道は臺北から臺灣西部の要地を南に進んで約二百三十哩の高雄に達する。行くゆく車窓から田野の風景を眺め、或は本島人村落のさまを見たから南下すれば、先づ**桃園街**を過ぐる。角板山に登つて蕃界の事情を見るには此處に下車し、臺車に乘つて行くのである。

新竹街、石油坑で知られた**苗栗街**等を過ぎて、臺北から百哩の所に**臺中市**がある。其の宏大な公園や盛んな市況等は遊覽者の一覽に價する。ついで**彰化**に至れば近く八卦山の遺跡を望むことができる。やがて二水驛を過ぎるが、**日月潭**に遊ぶ人は此處から汽車を乘り換へて東行するか、又は臺中から南投を過ぐる鐵路による。

更に南に進めば**嘉義街**に到る。大規模の製糖所で有名であるが、**阿里山**に登るには此處から登山鐵道によつて行く。又、北港媽祖廟に參詣するには嘉義から輕便鐵道によるのが便利である。嘉義から臺南に向ふ途中**北回歸線**を通過する、此の邊から一帶の風物は著しく熱帶的氣分を濃厚にして來る。

臺北から約二百哩で舊都**臺南市**に著く、市中には、蘭人占據時代以來の名所舊跡が多く、又純粹の臺灣氣分を漂はしてゐるのは臺南の市街であると云はれる。臺灣に來遊する人は基隆臺南まで見物する必要があらう。

臺南から二時間足らずで縱貫線の終點たる**高雄市**に達する。名勝としては高雄八景があるが、其の中に先年 皇太子殿下が行啓遊ばされて、御命名になつた壽山から港內の全景を見下す眺望は殊に芽出度い。尙此處から大製糖工場を以て聞ゆる**屏東**に行くには潮州線があり、有名な下淡水溪の大鐵橋がある。

東部海岸は幾千尺の斷崖が數十里に亙つて、怒濤打寄せる海面から直立し、遊覽の地も少ないが、此の斷崖絕壁をすぎる街道一帶の雄大壯絕な風景は他に見られぬものである。基隆の次驛、八堵から**宜蘭線**によつて二時間餘で終點**蘇澳**まで行き、其の絕景を賞するに足るであらう。途中、礁溪溫泉や宜蘭街、羅東街等がある。

〔遊覽日數其の他〕 臺灣の主要な遊覽地を巡遊するには、一週間乃至十日間で足りる。旅館その他の設備も十分に整つて愉快な旅行をすることが出來る、諸旅費も內地に比して安價であり、殊に人力車は低廉である、また到る處に內地人も居るから言葉の通じないと云ふ樣な不便はない。それで夏の休暇を利用して、海上旅行の涼味を味ひつゝ渡臺し、南國の異つた風物に接することは最も有益で又愉快な行樂であり、冬期は避寒の旅を兼ねて遊覽するのも好い。